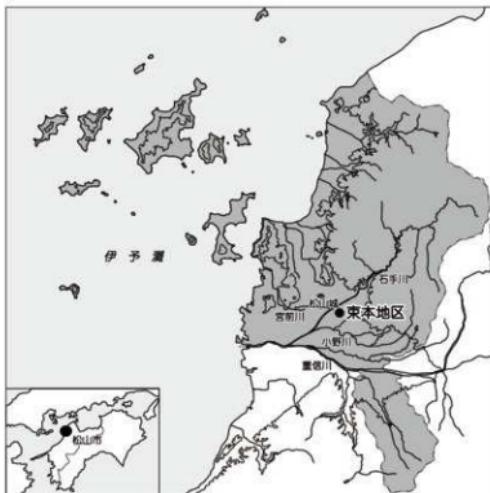


東本遺跡 5次調査

2017

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

つか もと い せき
東本遺跡 5次調査



2017

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

序　言

本書は、平成 11 年度に実施した東本遺跡 5 次調査の報告書です。

調査地周辺では、近年の開発の増加に伴い、多くの発掘調査が実施されています。なかでも東本遺跡 4 次調査では、全域でアカホヤ火山灰（約 6,300 年前）や始良 Tn 火山灰（約 22,000 ~ 25,000 年前）などの降灰層が検出されたほか、弥生時代後期の周堤帯を伴う円形の大型竪穴建物や青銅鏡（破鏡）などの希少な遺構・遺物が確認されています。そして樽味四反地遺跡 7 次調査、8 次調査からは、古墳時代初頭における西日本最大級の掘立柱建物が発見されるなど、平野内でも重要な地域に位置づけられます。

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴建物が多数検出されました。大半が比較的大型の規模を呈し、炉跡や高床部などの内部施設を持つものや、炭化材や焼土を大量に含む建物も確認されました。この炭化材はカシ材であることが特定され、当時の植生や建物構造を知る重要な資料となりました。

このような成果を得られましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力の賜物と厚くお礼申し上げます。本書が、学術研究の一助となり、さらには文化財保護及び生涯学習に資するものとなりますことを切に願います。

平成29年3月23日

松山市教育委員会教育長

藤田　仁

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会と財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが、平成11年度に松山市桑原地区内で実施した店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書の遺構は、呼称を略号で記述した。
　　堅穴建物：S B、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S P、
3. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした座標北である。
4. 基本層位や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1988)に準拠した。
5. 遺構の製図および遺物の実測・製図・トレイスは、河野史知の指示のもと、猪野美喜子、仙波千秋、仙波ミリ子、木下奈緒美、丹生谷道代、寺尾いづみが行った。
6. 遺物の復元は、青野茂子、松本美代子、渡部英子が行った。
7. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
8. 写真図版は遺構撮影を河野と大西朋子が行い、遺物撮影および図版作成は大西が行った。
9. 本書の執筆と編集は河野が担当し、浄書は猪野と木下の協力を得た。
10. 本書にかかる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 組織	1

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地	2
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の概要

第1節 層位	7
第2節 遺構と遺物	11

第4章 自然科学分析

第5章 まとめ

挿図目次

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1図	松山平野の地形概要図(縮尺1/200,000)	2
第2図	周辺の遺跡分布図(縮尺1/5,000)	4
第3図	調査地位置図(縮尺1/1,000)	6

第3章 調査の概要

第4図	調査地区割図(縮尺1/600)	7
第5図	東・西壁土層図(縮尺1/50)	8
第6図	南壁土層図(縮尺1/50)	9
第7図	遺構配置図(縮尺1/150)	10
第8図	SB1測量図(縮尺1/60)	11
第9図	SB1出土遺物実測図(縮尺1/4)	12
第10図	SB2測量図(縮尺1/60)	13
第11図	SB2出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	14
第12図	SB2出土遺物実測図(2)(縮尺1/2・1/4)	15
第13図	SB3測量図(縮尺1/60)	16
第14図	SB3出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	18
第15図	SB3出土遺物実測図(2)(縮尺1/2・1/4)	19
第16図	SB4測量図(縮尺1/100)	20
第17図	SB4出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	22
第18図	SB4出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	23
第19図	SB4出土遺物実測図(3)(縮尺1/4)	24
第20図	SB4出土遺物実測図(4)(縮尺1/4・1/2)	25
第21図	SB4内K5測量図(縮尺1/20)	26
第22図	SB4内K5出土遺物実測図(縮尺1/4)	27
第23図	SB5測量図(縮尺1/60)	28
第24図	SB5出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	29
第25図	SB5出土遺物実測図(2)(縮尺1/4・2/3・1/2)	30
第26図	SB6測量図(縮尺1/60)	31
第27図	SB6出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	32
第28図	SB6出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	33
第29図	SB7測量図(縮尺1/60)	34
第30図	SB7出土遺物実測図(縮尺1/4・1/2)	35
第31図	SD1測量図・出土遺物実測図(縮尺1/100・1/4)	36

第32図 SD2 測量図・出土遺物実測図(縮尺1/100・1/4)	37
第33図 SK2 測量図(縮尺1/30)	37
第34図 SK3 測量図・出土遺物実測図(縮尺1/40・1/4)	38
第35図 SK4 測量図・出土遺物実測図(縮尺1/30・1/4)	38
第36図 SK1 測量図・出土遺物実測図(縮尺1/20・1/3)	39
第37図 東本遺跡5次調査の種実	54
第38図 東本遺跡5次調査の炭化材	56
第39図 遺構の変遷(縮尺1/500)	58

表 目 次

第3章 調査の概要

表 1 堅穴建物一覧	40
表 2 堅穴建物の炉一覧	40
表 3 溝一覧	40
表 4 土坑一覧	41
表 5 SB1 出土遺物観察表(土製品)	41
表 6 SB2 出土遺物観察表(土製品)	41
表 7 SB2 出土遺物観察表(鉄製品)	43
表 8 SB3 出土遺物観察表(土製品)	43
表 9 SB3 出土遺物観察表(石製品)	44
表 10 SB3 出土遺物観察表(鉄製品)	44
表 11 SB3 出土遺物観察表(土製品)	44
表 12 SB4 出土遺物観察表(土製品)	44
表 13 SB4 出土遺物観察表(鉄製品)	47
表 14 SB4 内 K5 出土遺物観察表(土製品)	47
表 15 SB5 出土遺物観察表(土製品)	47
表 16 SB5 出土遺物観察表(石製品)	49
表 17 SB5 出土遺物観察表(鉄製品)	49
表 18 SB6 出土遺物観察表(土製品)	49
表 19 SB7 出土遺物観察表(土製品)	50
表 20 SB7 出土遺物観察表(鉄製品)	51
表 21 SD1 出土遺物観察表(土製品)	51
表 22 SD2 出土遺物観察表(土製品)	52
表 23 SK3 出土遺物観察表(土製品)	52
表 24 SK4 出土遺物観察表(土製品)	52
表 25 SK1 出土遺物観察表(土製品)	52

第4章 自然科学分析

表26 種実同定結果	53
表27 樹種同定結果	55

写真図版目次

- 図版 1 1. 調査前全景（南西より）
2. 遺構検出状況（北より）
3. 南壁土層（北より）
図版 2 1. 調査風景（北東より）
2. SB4 遺物出土状況①（東より）
3. SB4 遺物出土状況②（南東より）
図版 3 1. SB5 炭化材・焼土検出状況（北西より）
2. SK1 遺物出土状況（西より）
3. 遺構完掘状況（北より）
図版 4 1. SB4 遺構完掘状況（北より）
2. SB2 完掘状況（北東より）
3. SK3 完掘状況（北西より）
図版 5 1. 出土遺物（SB2、SB3）
図版 6 1. 出土遺物（SB4）
図版 7 1. 出土遺物（SB4、SB4 内 K5、SB5）
図版 8 1. 出土遺物（SB5、SB6、SB7）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

1996(平成8)年11月、有限会社ナローリバーフードより、松山市東本一丁目120番1における店舗建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.83 枝松遺物包含地」内に所在する。申請地周辺では、これまでに数多くの調査が行われ、弥生時代から古墳時代の集落関連構造や遺物が多数検出されている。なかでも申請地西隣の東本遺跡4次調査では、円形の大型竪穴住居から青銅鏡が出土し、東本遺跡の弥生集落は当平野の拠点的集落であることが判明した。また、アカホヤ火山灰(約6,300年前)やAT火山灰(約21,000～25,000年前)の堆積が確認され、アカホヤ火山灰中や下層からは楢先形石器が出土し、縄文時代集落の存在も示唆された。

これらのことから、文化財課は当該地の埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、1996(平成8)年11月21日に試掘調査を実施した。試掘調査では対象地内中央部に1条の試掘トレンチを設定し、地表下20～30cmで竪穴住居・溝・柱穴を確認し、弥生土器の遺物が出土した。

これらの結果を受け、当該地における遺跡の取り扱いについて文化財課と地権者は協議を重ね、開発工事によって失われる遺跡に対し、記録保存のため発掘調査を実施することになった。発掘調査は、調査地及び周辺地域における弥生時代集落の広がりや構造解明を主目的に、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと1999(平成11)年7月22日に開始した。

第2節 組織

調査組織 (平成11年度)

松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷
事務局 局長 大野 嘉幸
次長 森脇 将
次長 赤星 忠男
文化教育課 課長 松平 泰定

財團法人松山市生涯学習振興財團
理事長 中村 時広
事務局長 二宮 正昌
事務局次長 河口 雄三
埋蔵文化財センター所長 河口 雄三
次長 田所 延行
調査係長 田城 武志
(調査担当) 河野 史知

刊行組織 (平成28年度)

松山市教育委員会
教育長 山本 昭弘(兼任~10/1)
教育長 藤田 仁(10/2~)
事務局 局長 前田 昌一
次長 家串 正治
次長 杉本 威
文化財課 課長 若江 俊二
主幹 越智 茂樹

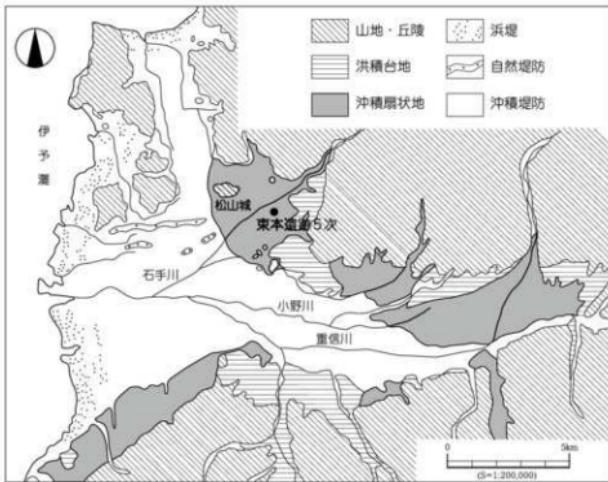
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
理事長 中山敏治郎
事務局 局長 中西 真也
次長兼総務部長 橋 昭司
文化振興部 部長 梶原 信之
埋蔵文化財センター
所長兼考古館館長 村上 卓也
(調査・研究)主査 梅木 謙一
(普及・啓発)主査 橋本 雄一
(編集担当)主任 河野 史知

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

松山平野は県下最大の平野であり、主に重信川によって形成された扇状地である。その支流の一つである石手川は、高繩山に源を発し平野の北東部を南西方向に向け横断しながら小野川と重信川に合流し伊予灘に注ぐ河川である。この石手川は構辺町周辺から南西に向かって大規模な扇状地を形成する。その扇状地の石手川左岸、標高35mに今回の調査地は立地する。

調査地が立地する扇状地は、約22,000～25,000年前の始良Tn火山灰の降下・堆積期にはすでに段丘化していたと推定される。しかし、この火山灰層直下に火山灰混じりの砂礫層が堆積していることから、この地で始良Tn火山灰の降下・堆積後に短期間の洪水のような現象が起こったと推定される。しかし、その後は小河川の流路に沿って、部分的に小規模な洪水や砂礫の堆積が起こったが、石手川本流による激しい洪水に襲われることはなく、縄文時代や弥生時代の遺跡の立地については、安定した地形環境であったと推定される（平井1989）。



第1図 松山平野の地形概要図

第2節 歴史的環境

本遺跡一帯は桑原地区と称され、これまでの調査で弥生時代～古代にかけての堅穴建物・土坑・溝などの集落遺構が検出され同地区における集落の存在と規模が明確になり始めている。ここでは、近年に調査された遺跡を中心に桑原地区の遺跡の展開を概説する。

旧石器時代

当地区に限らず、松山平野全域においても、これまでに旧石器時代の明確な遺構は発見されていない。しかし、樽味遺跡・樽味四反地遺跡においてはポケット状に堆積した始良Tn火山灰土を確認し、東本遺跡4次調査では始良Tn火山灰の一次堆積層を確認している。

縄文時代

東本遺跡4次調査地では、縄文時代早期にあたる約6,300年前のアカホヤ火山灰層が検出されている。このアカホヤ火山灰層中と下層の上面から先土器時代末から縄文時代早期以前の石器が見つかっている。また、アカホヤ火山灰層下以前の堆積層中から焼土を検出している。これらのことから同調査地では、縄文時代早期以前の遺跡が存在したことが想定されている。このほか、桑原田中遺跡からは突帯文系の深鉢片が1点出土している。

弥生時代

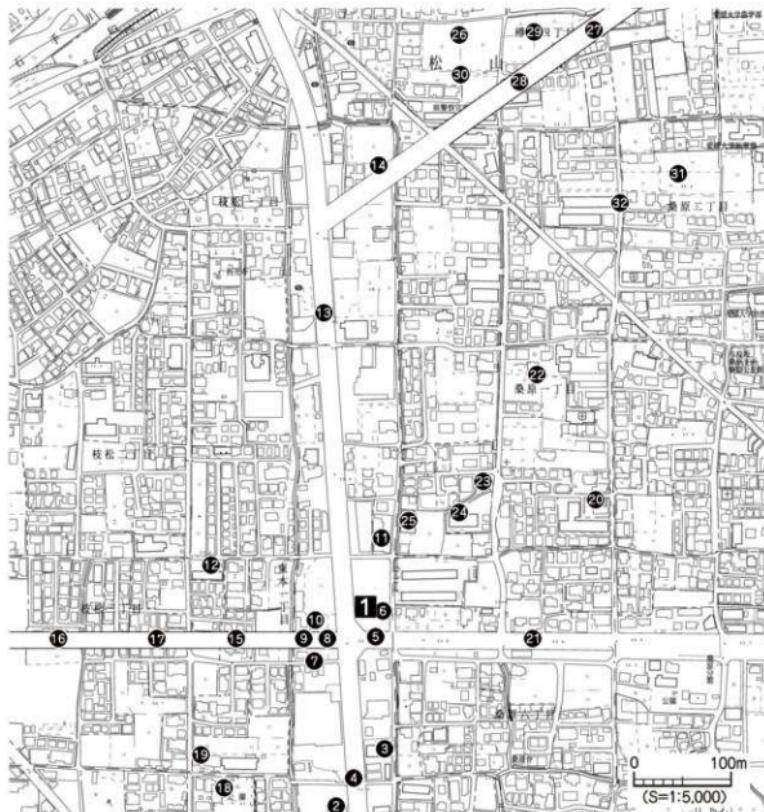
前期では、樽味遺跡より前期前半の土坑SK5と溝SD4、樽味高木遺跡からは前期後半の土器を検出し、桑原田中遺跡2次調査でも土器片を検出している。

中期では、樽味高木遺跡1～3次調査から中期後半の土器が出土している。特に2次調査のSB1と3次調査のSX1からは資料性の高い土器が出土している。樽味四反地遺跡5次調査のSB8からは弥生時代中期後半～後期初頭の遺物が出土している。樽味高木遺跡9次調査より中期後半の掘立柱建物1棟、土坑2基を検出し、枝松遺跡6次調査では土坑を2基検出している。

後期では、調査地北部の樽味高木遺跡2次調査からは堅穴建物、樽味四反地遺跡2～5次調査から後期末の堅穴建物を検出しており、この地域に弥生時代後期～後期末にかけて集落が広がっていたことを示すものである。遺物では樽味立派遺跡の包含層中より『貨泉』の出土がある。また、樽味高木遺跡3次調査からは「船」を描いた線刻(絵画)土器が出土している。周辺においても集落址が多く検出されており、調査地西隣の東本遺跡4次調査からは小型～大型の堅穴建物を検出し、大型建物SB203は周堤帯を検出し、SB302からは破鏡が出土している。東本遺跡2次調査や6次～10次調査からも大型の堅穴建物を検出し、建物内にはベッド状の施設を伴うものが多い。なかでも6次調査の方形堅穴建物は竪治関連遺構の可能性をもつ。桑原稻葉遺跡では、円形と方形の堅穴建物1棟を検出している。調査地南部の桑原高井遺跡では、堅穴建物5棟や土坑が検出されている。

古墳時代

古墳時代では、樽味四反地遺跡6次調査で弥生時代後期末～古墳時代初頭の区画溝と柵列を伴う考えられる総柱構造の大型掘立建物1棟を検出している。さらに、南側に隣接する同8次調査からも総柱構造の大型掘立建物1棟を検出している。このほかに6次調査からは古墳時代中期～後期初頭の堅穴建物を多数検出し、これらの建物からは滑石製の臼玉やガラス小玉、瑪瑙製の勾玉が出土している。桑原遺跡3次調査からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の溝1条が検出されている。樽味高木遺跡の堅穴建物や土坑からは5世紀代の須恵器・土師器の壺・壺・高杯などが出土している。また、桑原本郷遺跡

**1 束本遺跡 5次調査**

- ④** 束本遺跡 4次調査
- ⑦** 束本遺跡 8次調査
- ⑩** 束本遺跡 11次調査
- ⑬** 枝松遺跡 4次調査
- ⑯** 枝松遺跡 9次調査
- ⑲** 枝松遺跡 12次調査
- ㉒** 桑原遺跡 6次調査
- ㉕** 桑原高井遺跡 3次調査
- ㉘** 梅味四反地遺跡 8次調査
- ㉙** 梅味東稻葉遺跡 1・2次調査

2 束本遺跡 2次調査

- ⑤** 束本遺跡 6次調査
- ⑧** 束本遺跡 9次調査
- ⑪** 束本遺跡 12次調査
- ⑭** 枝松遺跡 6次調査
- ⑯** 枝松遺跡 10次調査
- ㉐** 桑原遺跡 3次調査
- ㉓** 桑原高井遺跡 1次調査
- ㉖** 梅味四反地遺跡 6・13・21次調査
- ㉙** 梅味四反地遺跡 16・17次調査
- ㉚** 桑原西稻葉遺跡 1・2次調査

3 束本遺跡 3次調査

- ⑥** 束本遺跡 7次調査
- ⑨** 束本遺跡 10次調査
- ⑫** 枝松遺跡 3次調査
- ⑮** 枝松遺跡 8次調査
- ⑯** 枝松遺跡 11次調査
- ㉑** 桑原遺跡 4次調査
- ㉔** 桑原高井遺跡 2次調査
- ㉗** 梅味四反地遺跡 7次調査
- ㉙** 梅味四反地遺跡 18次調査

第2図 周辺の遺跡分布図

では、5世紀後半の方形堅穴建物や掘立柱建物が検出され、さらに包含層より滑石製の白玉100点余りが須恵器と共に出土している。樽味立派遺跡からは10数棟の堅穴建物と掘立柱建物（古墳時代後期以降）を検出し、樽味四反地遺跡5次調査においても6棟の堅穴建物を検出している。桑原遺跡5次調査では、溝から6世紀代と考えられる斎弔や木鍤などが出土している。

桑原地区では、集落だけでなく前方後円墳2基が古くから知られている。経石山古墳は全長485mを測り、5世紀末に時期比定されている。また、三島神社古墳は全長45mを測り、初期畿内型の横穴式を内部主体にもち6世紀前葉に比定されている。この古墳は、発掘後に削平され消滅している。また、東側丘陵部には東野お茶屋台古墳群、畠寺竹ヶ谷古墳群、畠寺古墳群が存在する。東野お茶屋台古墳では周溝から5世紀の須恵器が出土している。東野お茶屋台古墳では、7世紀初頭の横穴式石室が調査されている。畠寺竹ヶ谷古墳においても周溝内から須恵器や直刀が出土している。同古墳群内にある6世紀中頃～後半の畠寺6号墳では、内部主体は不明ながら埴輪列を検出している。

古代

樽味四反地遺跡5次調査SR1の自然流路からは7～8世紀の土器と共に須恵器の硯4個体が出土している。硯は、松山平野では希少な資料であり注目される。東本遺跡6次調査では古代末に埋没したと考えられる自然流路を検出している。流路幅は30m以上を測る。埋土中より近江系の縁軸が出土している。樽味四反地遺跡では10世紀代に比定される溝が検出されている。

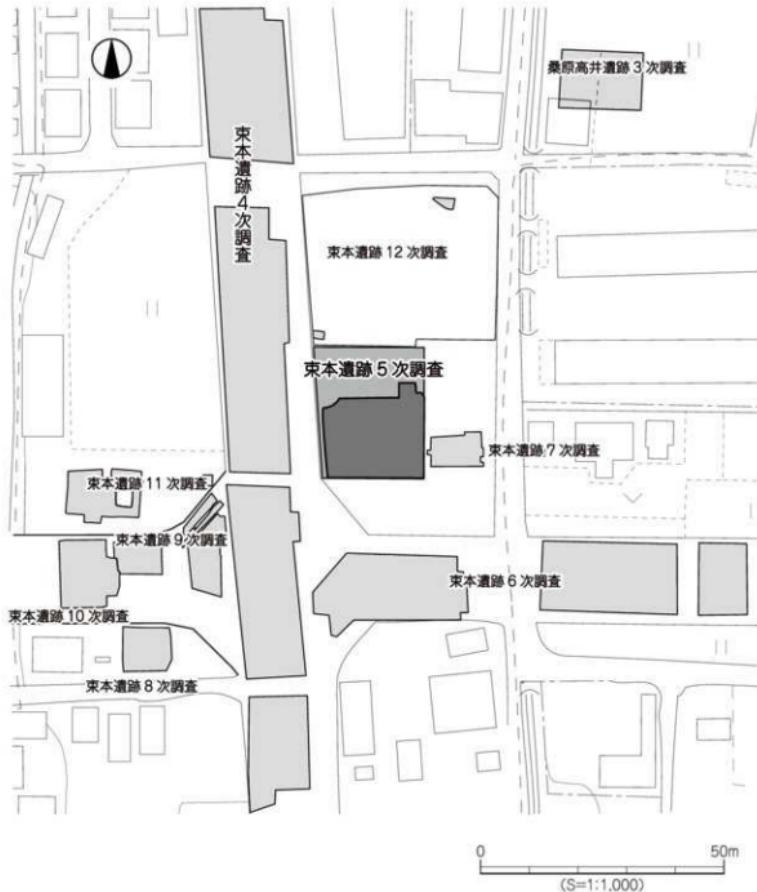
中世

また、樽味遺跡の溝からは14世紀後半、溝・土坑からは15世紀代の土師器が出土している。特に溝は集落境界の溝として位置づけられている。桑原遺跡4次調査からは3区で掘立柱建物や土坑、溝を検出し、4区では祭祀遺構と考えられる柱穴1基を検出した。桑原高井遺跡からは「首塚」とされる土坑墓が数基検出され、東本遺跡6次調査でも同様の土坑墓1基を検出している。

〔参考文献〕

- 梅木謙一編 1992 「樽味立派」「樽味高木」「樽味四反地」「桑原田中」「経石山古墳」「桑原地区的遺跡」松山市文化財調査報告書26
- 梅木 謙一 1994 「樽味高木2・3次」「樽味四反地2・3・4次」「桑原田中2次」「桑原地区的遺跡II」松山市文化財調査報告書46
- 森 光晴 1980 「東本II桑原高井遺跡」松山市文化財調査報告書14
- 「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」「三島神社古墳」「愛媛県史資料編 考古」松山市教育委員会
- 岡田 敏彦 1990 「桑原植生遺跡」「桑原住宅埋蔵文化財調査報告書」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 宮本 一夫 1989 「道後平野中の世土器編年 -13～15世紀を中心に-」「鷹子・樽味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財調査室I
- 西尾 幸則 1986 「畠寺竹ヶ谷古墳群」「愛媛県史 資料編考古」愛媛県史編纂委員会
- 高尾 和長 1996 「東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査」松山市文化財調査報告書54・55
- 橋本 雄一 1996 「東野お茶屋台遺跡5次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ
- 水本 完児 1997 「畠寺6号墳」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ
- 相原 浩二 2001 「桑原遺跡3次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報12I
- 栗田 茂敏 2002 「桑原本郷道路」「桑原遺跡」「桑原地区的遺跡IV」松山市文化財調査報告書86
- 高尾 和長 2002 「樽味四反地遺跡5次調査」松山市文化財調査報告書87
- 小玉亞紀子 2003 「樽味四反地遺跡-6次調査-」松山市文化財調査報告書94
- 吉岡 和哉 2004 「桑原遺跡5次調査地」松山市文化財調査報告書99
- 河野 史知 2004 「東本遺跡7次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報16I
- 相原浩二編 2005 「東本遺跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡4次調査地」松山市文化財調査報告書105

- 加島 次郎 2007 「枝松道路6次調査地」「櫛味四反地道路7次・8次・9次・11次調査地」「櫛味高木道路7・8・9・11次調査地他」
松山市文化財調査報告書117
- 宮内 慎一 2010 「桑原高井遺跡3次・東本道路8次調査・東野お茶屋台道路8次調査」松山市文化財調査報告書138
- 相原 浩二 2011 「東本道路-9次・10次調査-他」松山市文化財調査報告書153



第3図 調査地位置図

第3章 調査の概要

第1節 層位(第5-6図)

調査地は石手川左岸の低位段丘上、標高約35mに立地する。調査以前は水田であった。

基本層位は、以下の9層である。

第I層－現代の水田耕作土で灰色土が調査区全域に層厚15～25cmを測る。

第II層－水田層下の床土で、色調の違いにより2層に分層される。

①黄灰色土で調査区全域に層厚3～9cmを測る。

②①層より灰色が強く、南東部と北西部に層厚2～11cmを測る。

第III層－調査区西南部のやや地形の低い部分に薄く堆積し、上面で遺構を検出した。本層は、土壤が黒色でガラス質の細粒を含む性質から、約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した広域テフラ、鬼界アカホヤ火山灰の可能性が高い。層厚7～10cmを測る。

第IV層－上面が最終の遺構検出面である。

①暗褐色土で粘性が強く、全域に層厚10～20cmを測る。

※以下の層は、調査区西南隅の深掘りトレンチにて確認したものである。

第IV層－②暗褐色土で粘性が弱く、層厚15～24cmを測る。

第V層－土壤に黄褐色のガラス質細粒を含む性質から、約2.2～2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した広域テフラ、姶良Tn火山灰の1次堆積の可能性が高い。層厚22～30cmを測る。

第VI層－粘性を帯び、色調の違いから2層に分層される。

①明褐色土で層厚3～7cmを測る。

②明褐色土で層厚5～9cmを測る。

第VII層－明灰黄色土に5mm大の白色礫を少含し、やや粘性を帯びる。層厚16～30cmを測る。

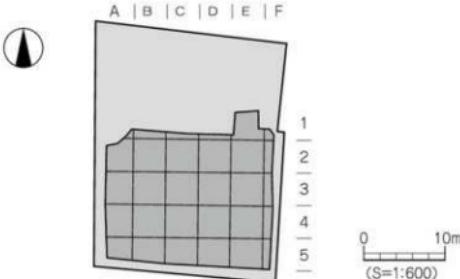
第VIII層－ザラザラした質感で、色調や礫の含有量から3層に分層される。

①黄褐色砂質土で最大層厚39cmを測る。

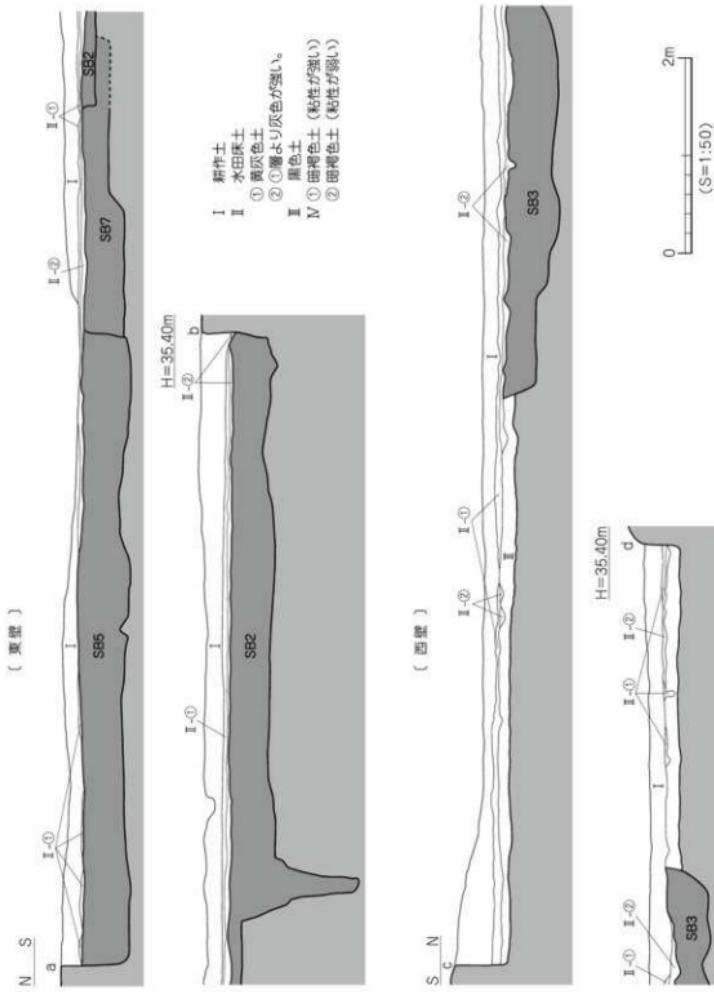
②黄褐色砂質土で5mm大の白色礫を多含し、層厚7～59cmを測る。

③②層に暗灰色を強く帯び、層厚6～26cmを測る。

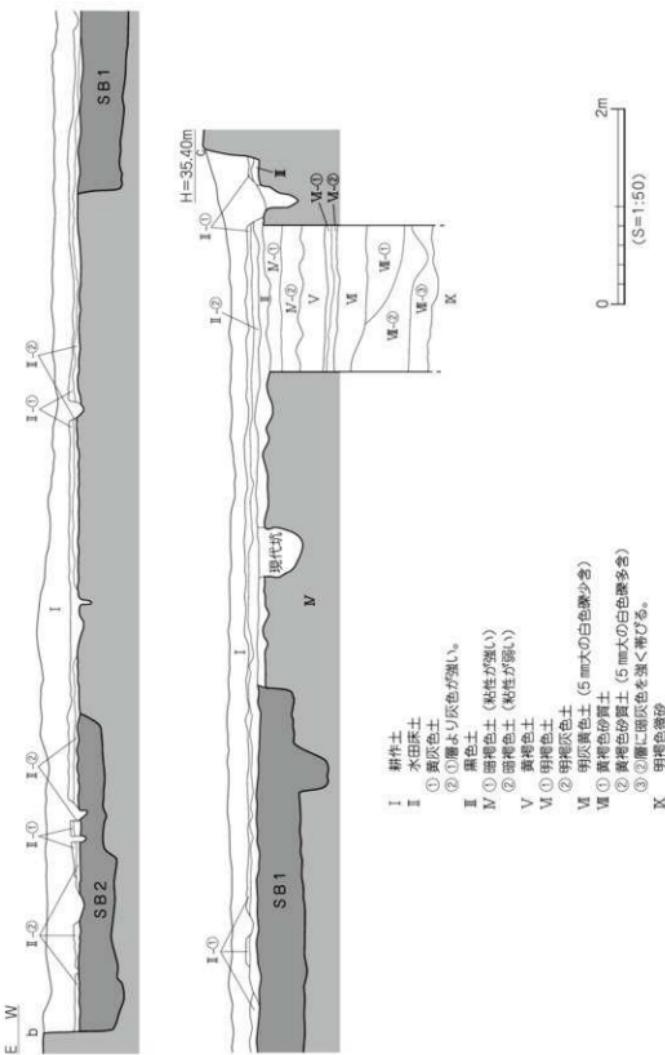
第IX層－しまりの強い微砂である。



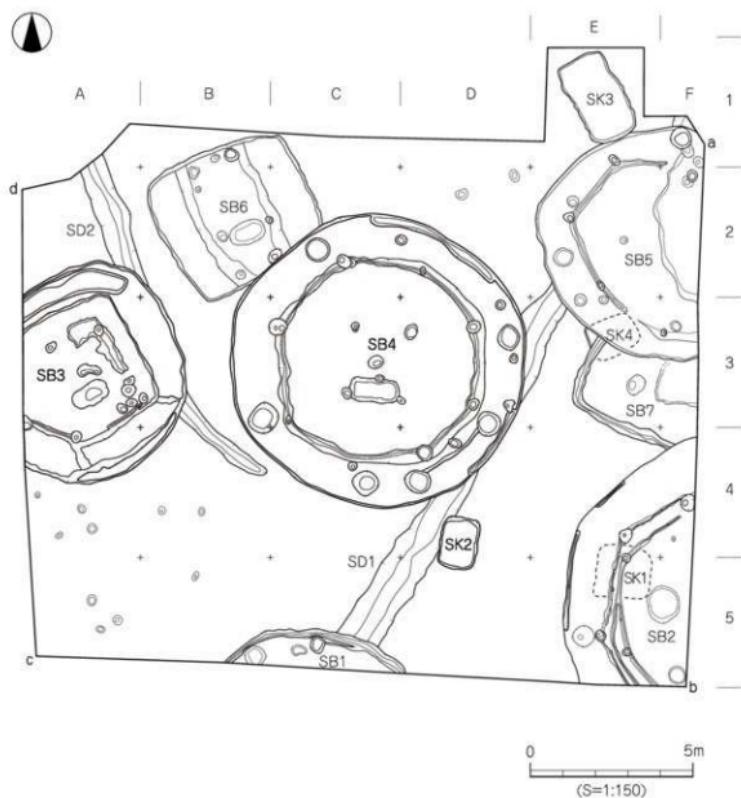
第4図 調査地区割図



第5図 東・西壁土層図



第6図 南壁土層図



第7図 遺構配置図

第2節 遺構と遺物

本調査では、弥生時代と近世の遺構や遺物を検出した。遺構には堅穴建物7棟、溝2条、土坑4基、柱穴20基がある。遺物は主に遺構内から出土し、弥生土器・鉄器・炭化材・骨等がある。

(1) 弥生時代

1) 堅穴住居

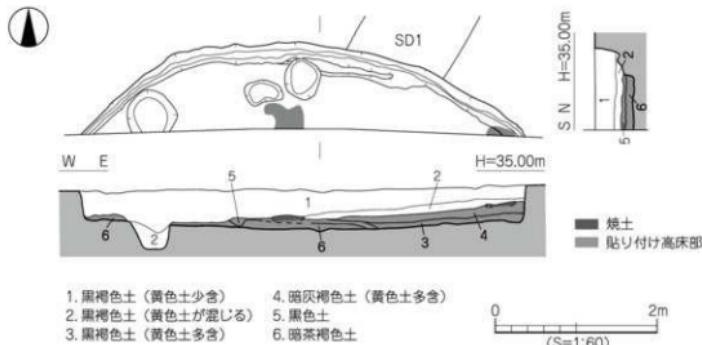
SB1(第8図)

調査区南側B～D・5区に位置し、SD1を切り、遺構の大部分は調査区外に延びる。平面形態は円形を呈する。検出規模は東西5.5m、南北1.2m、深さ45cmを測る。推定直径は7mになる。内部施設は高床部と周壁溝を検出し、主柱穴は未検出である。周壁溝は壁体に沿って幅14～20cm、深さ3～6cmで、建物の北側を巡る。壁体の内側では、北側に貼り付けの高床部を検出した。高床部の幅は調査区外に延びるため不明で、高さは基底面から6～24cmを測る。高床部は黄色土と黒褐色土・暗灰褐色土・暗褐色土に黄色土が混じる土を貼り付けて構築しており、上面は平坦面をなし、高床部の中央部と東端では焼土を検出した。住居内の埋土は黒褐色土である。遺物は高床部から浮いて散在した状態で出土しており、器種は弥生土器の壺形土器・壺形土器・鉢形土器がある。

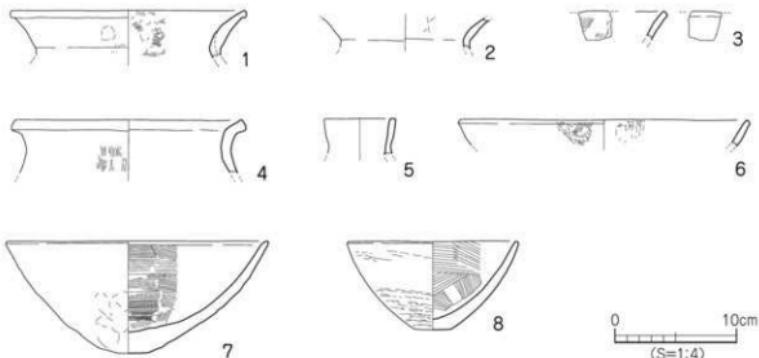
出土遺物(第9図)

1～8は弥生土器である。1～3は壺形土器で、1・2は「く」字状を呈する口縁部をもち、1は口縁端部がやや下方に拡張する。外面に横ナデ調整、内面にはハケメ調整が施される。2は口縁部内面に指頭痕が残る。3は外反する口縁部の内外面に横ナデ調整が施される。4・5は壺形土器で、4は直立する短い頸部に、口縁部は外反し、端部は平らな面をなし、外面にはハケメ調整が施される。5はミニチュア品であり、直立する口縁部に、端部は水平な面をなし、内外面には横ナデ調整が施される。6～8は鉢形土器で、6～8は直口口縁で、6は口縁端部が平らな面をなし、内外面にはハケメ調整後ミガキ調整が施される。7・8は平底の底部から内湾して立ち上がり、7は内面にハケメ調整、8は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、本住居の埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。



第8図 SB1 測量図



第9図 SB1 出土遺物実測図

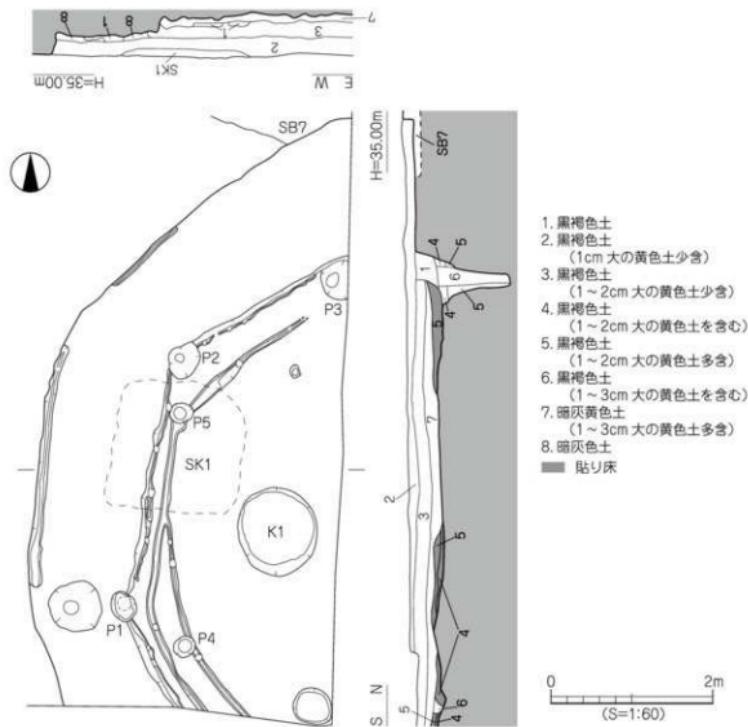
SB2(第10図)

調査区南東部E～F・4～5区に位置し、SK1に切られ、SB7を切る。遺構の東半は調査区外に延びる。平面形態は八角形に近い円形を呈する。検出規模は東西3.8m、南北7.5m、深さ45cmを測り、推定直径は9mになる。内部施設は高床部、主柱穴、貼り床、周壁溝を検出した。高床部は地山を削り出して構築している。規模は幅1.1～1.6m、基底面からの高さは23～30cmを測る。主柱穴は高床部内側の角に3本(P1～P3)を検出し、直径30～50cm、深さ35～57cmを測る。主柱穴の柱痕は貼り床上面で検出し、柱穴の掘り方は貼り床を掘り下げた後に検出した。貼り床は、建物内の浅い凹みで検出し、厚さ5～10cmを測る。周壁溝は壁体に沿った高床部外側と、高床部内側に沿った床面で検出した。いずれも幅5～17cm、深さ2～9cmを測り、周壁溝内から直径3～9cmで断面形が窄まる杭状の小穴も検出した。また、床面にて25～50cm内側を巡る周壁溝とそれに伴う柱穴(P4・P5)など、SB2の建て替え前の内部施設を検出した。住居内の埋土は黒褐色土に黄色土が少し混じり、貼り床部では黒褐色土に黄色土を多含する土が薄く堆積する。遺物は建物全体より散在して出土したが、ほとんどの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は弥生土器の甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高杯形土器・支脚形土器や鉄製品がある。建物内の床面では土坑(K1)を検出した。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は東西0.98m、南北1.07m、深さ21cmを測る。土坑内の床面にて人頭大の細長い礫を検出した。遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器の小片が僅かに出土したが、団化には至らなかった。埋土は黒褐色土である。

出土遺物(第11-12図)

9～53は弥生土器である。9～18は甕形土器で、9は「く」字状を呈する口縁部をもち、内外面には横ナデ調整が施される。10は外反する口縁部をもち、内外面にはハケメ調整が施される。11～14は緩やかに外反する口縁部で、11～13の内外面にはハケメ調整が施される。14は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施される。15～18は平底の底部をもち、15は外面にハケメ調整、内面には指頭痕が残る。16は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施される。17は外面にタタキ調整、内面にはナデ調整と指頭痕が残る。18は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施され、指頭痕が残る。19～33は壺形土器である。19は口縁端部が垂下し、端面には5～6条の波状文が施され、外面にハケ

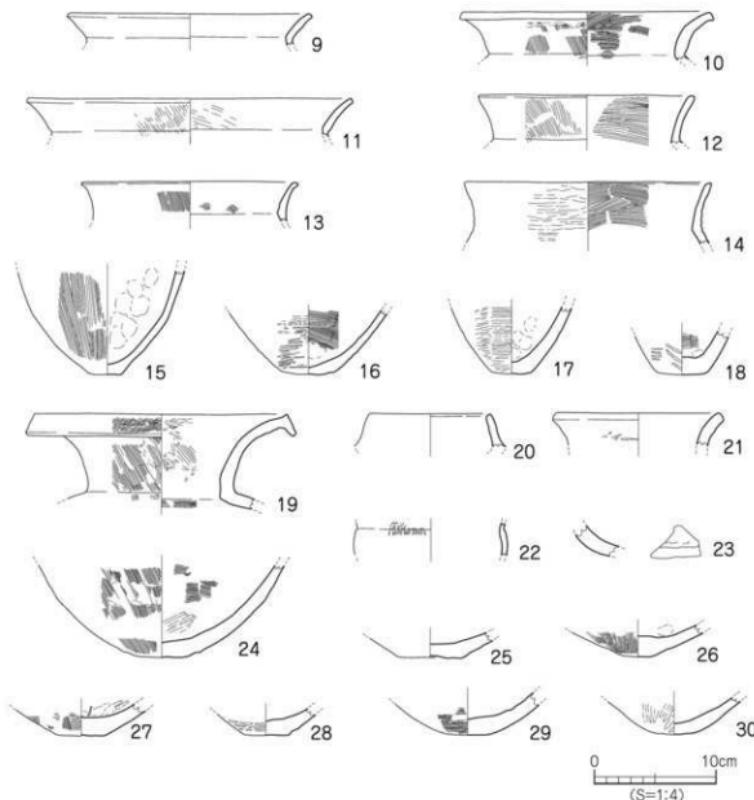
メ調整、内面にはハケメ調整後ミガキ調整が施される。20は複合口縁壺の拡張部である。21は外反する口縁部の外面にナデ調整が施される。22は頸部に半截竹管文が3列巡る。23は肩部に貝殻による刺突文が施される。24～30は平底の底部で、24は胴下半部に膨らみをもつ。25は底部中央部がやや凹む。26は厚い底部をもつ。27は外面にタタキ調整後ハケメ調整、内面にはハケメ調整が施される。28・29は外面にタタキ調整が施される。30はやや丸みをもつ底部で、外面にはタタキ調整が施される。31～33は底部が立ち上がりをもって突出する平底で、31は底部がやや凹む。34～46は鉢形土器である。34は緩やかに外反する口縁部をもち、内面にはミガキ調整が施される。35は緩やかに外反する口縁部をもち、内面にはハケメ調整後ミガキ調整が施される。36は口縁部が大きく外傾する。37は口縁部が僅かに外反しており、外面下胴部にはタタキ調整が施される。38・39は緩やかに外反する口縁部をもち、38は大型品である。40・41は直口口縁である。40は口縁外端部が小さく突出し、外面上部にタタキ調整、下部にハケメ調整、内面上部にハケメ調整、下部にはナデ調整が施される。41は外面



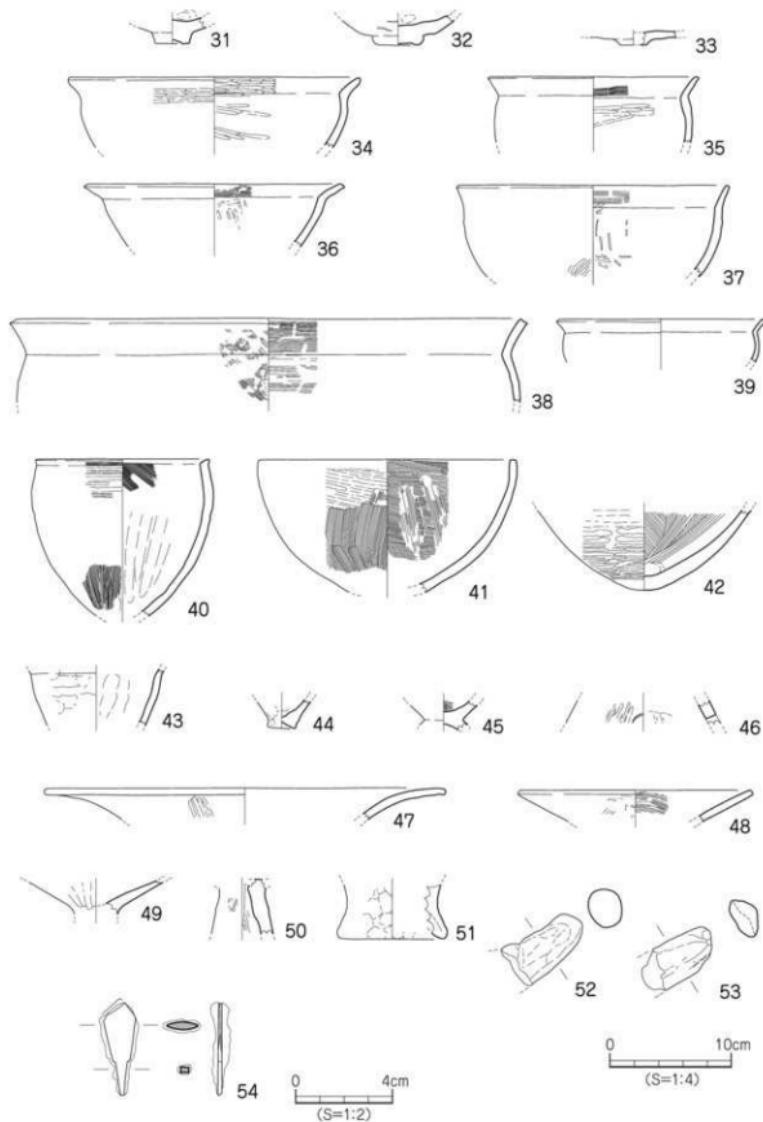
第10図 SB2測量図

上部にタタキ調整、下部にハケメ調整、内面にはハケメ調整が施される。42は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施される。43はやや外傾する胴部の内外面にナデ調整が施される。44はミニチュア品で上げ底の底部をもつ。45は台付鉢で括れの上げ底をもつ。46は円孔がある台付鉢の脚部で外面はナデ調整、内面にはしづり痕がみられる。47～50は高壊形土器である。47は大きく外反する口縁部をもつ。48は外傾する口縁部で、外面にミガキ調整が施される。49は壊部の外面にミガキが施される。50は脚部で、内面にしづり痕がみられる。51～53は支脚形土器である。51は胴部中位が括れ、外面には指頭痕がみられる。52・53は上外方にのびる角状の突起部である。52は断面形が円形に近い楕円形、53は扁平な楕円形を呈する。54は鉄製品の有茎式鉄鎌で、鎌身部は柳葉形を呈し、全体は錆に覆われている。鎌身部の長さ3.83cm、幅1.6cm、茎部の幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。

時期：出土した弥生土器の特徴から、本住居の埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。



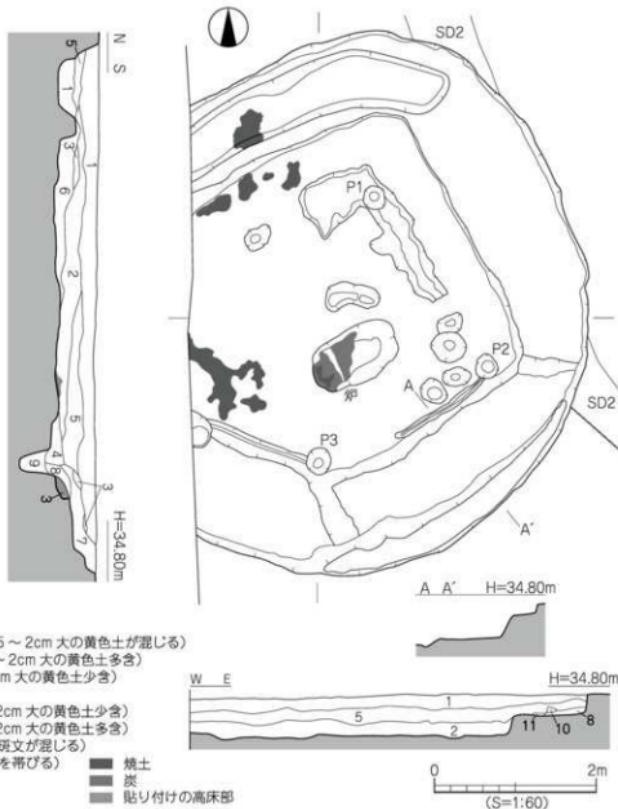
第11図 SB2出土遺物実測図(1)



第12図 SB2 出土遺物実測図(2)

SB3(第13図)

調査区西端 A ~ B・2 ~ 4 区に位置し、SD2 を切り、西側は調査区外に延びる。平面形態は五角形に近い円形を呈する。検出規模は東西 4.9m、南北 6.7m の推定直径 7m、深さ 67cm を測る。内部施設は高床部、主柱穴、周壁溝、炉を検出した。高床部は五角形が推定され、南西隅の一部を除いて地山を削り出して築造する。幅 1.0 ~ 1.2 m、基底面からの高さは 10 ~ 24 cm を測る。北側の高床部では、溝状に延びる掘り込み(K1)を検出した。この掘り込みは断面形態が逆台形状を呈し、基底面は西側が低くなる。検出長 3.3 m、幅 60 ~ 70 cm、深さ 16 ~ 21 cm。埋土は黒褐色土で、弥生土器の細片が出土し、高床部上面から建物基底面にかけては焼土を検出している。南東部の一辺からは、高床部とは異なる地山を削り出した



第 13 図 SB3 測量図

段を2段検出した(エレベーション:A-A')。この段は長さが3.6~3.7mで、幅は上段が30cm、下段が70~80cm、高さはSB3検出面から上段まで9~13cm、上段から下段まで20~33cm、下段から床面まで8~15cmを測る。炉は住居の中央部南側にある。平面形態は隅丸長方形で、断面形態はレンズ状を呈し、炉床の西半部に炭を検出した。規模は長軸1.1m、短軸0.7m、深さ13cmを測る。主柱穴は3本(P1~P3)を検出し、P3から柱痕を確認した。柱間は2.0~2.2mで、柱穴は直径25~45cm、深さ36~50cmを測る。周壁溝は南側の高床部内側に沿って、床面において検出し、幅8~10cm、深さ3~6cmを測る。北東部の床面において平面形態が「L」字状、断面形態は皿状の浅い溝を検出した。長さ2.5m、幅0.4~0.6m、深さ5cmを測り、埋土は黒褐色土である。建物内の埋土は上層が黒褐色土、中層が黒色土、下層は黒褐色土と黒色土に黄色土が少し混じる。遺物は建物全体から散在して出土したが、ほとんど床面から浮いた状態での出土である。器種は弥生土器の壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高環形土器・器台形土器・支脚形土器や石製品・鉄製品がある。

出土遺物(第14・15図)

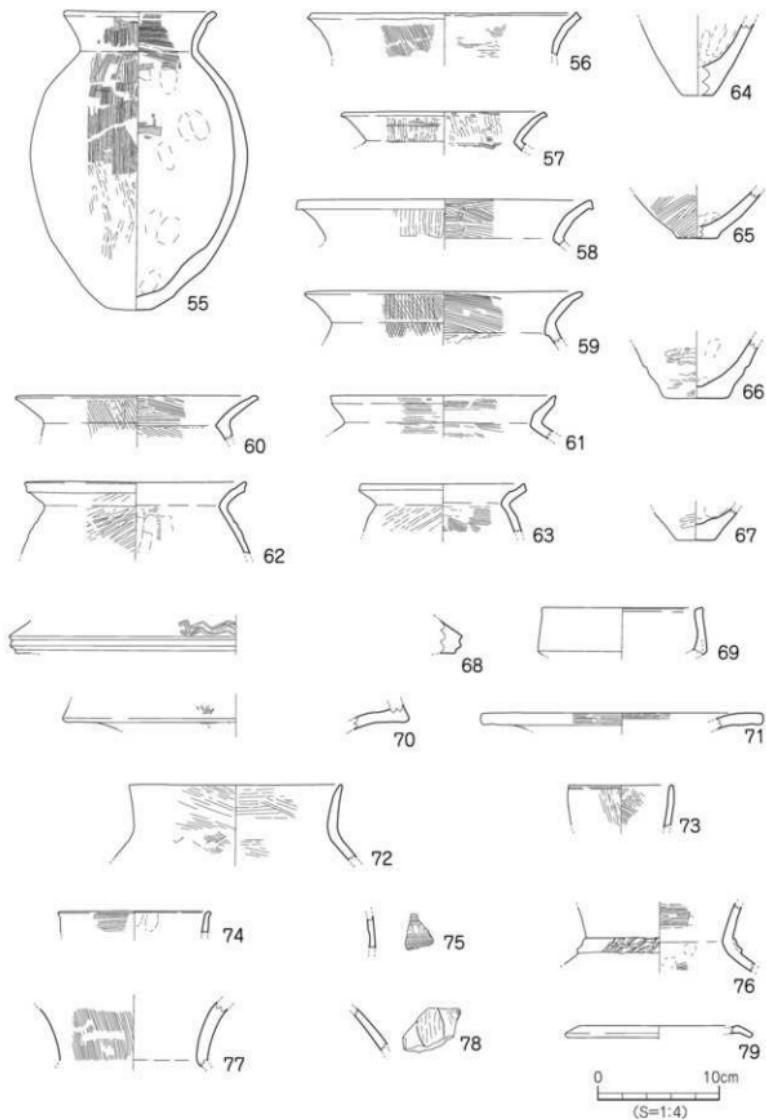
55~92は弥生土器である。55~67は壺形土器で、55は平底の底部、長球形の胴部、外反する口縁部をもつ。外面は口縁部から上胴部にハケメ調整、下胴部にミガキ調整を施し、内面は口縁部にハケメ調整、胴部にはハケメ調整を施し、指頭痕が残る。56は外反する口縁端部が上方に小さく肥厚され、内外面にはハケメ調整が施される。57は内外面にハケメ調整後ミガキ調整が施される。58は外反する口縁端部が下方にやや肥厚される。59は「く」字状を呈した口縁部をもつ。61・62は口縁端部が上方にのみ、63は口縁端部がやや凹む。58~61は内外面にハケメ調整、62・63は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施される。64~67は平底の底部をもち、66・67は外面にタタキ調整が施される。68~79は壺形土器で、68~70は複合口縁壺である。68~70は拡張部に波状文が施されている。69は直立気味の拡張部である。71は大きく外反する口縁部をもち、端部は平らな面をなす。72は直立気味の口縁部をもち、内外面にはハケメ調整が施される。73は直立気味の口縁部をもつ。74・75は直立気味の口縁部に沈線がみられる。76は頸部に斜格子文の刻目凸帯が付く。77は外反する頸部である。78は上胴部に2条の線刻が施されている。79は口縁端部が外下方にのびる。80~85は鉢形土器で、80は口縁部が外反する。外面にミガキ調整、内面にはハケメ調整とタタキ調整が施される。81~84は直口口縁で、81は端部が面をなす。82は内湾する胴部に、口縁端部は面をなす。83は平底の底部で、内湾して立ち上がる胴部をもつ。83・84の外面にはタタキ調整が施される。84は底部が突窪状を呈す。85はやや丸みをもつ底部に、内面はハケメ調整が施される。86~90は高環で、86~89は大きく外反する口縁部である。内外面にはミガキ調整が施される。90は穿孔をもつ脚部である。91は器台形土器で、口縁端部に半截竹管文が2列に施され、逆「U」字状の貼文がつく。92は支脚形土器である。角状の突起部で、断面形は橢円形になる。

石製品 93は未完成品で、緑色片岩製の完成品である。自然面で覆われ、表裏面に微細な線条痕がみられる。長さ11.1cm、幅6.15cm、最大厚0.98cm、重さ129.0gを測る。石材・法量・平面形態などから石庖丁の未完成品の可能性をもつ。

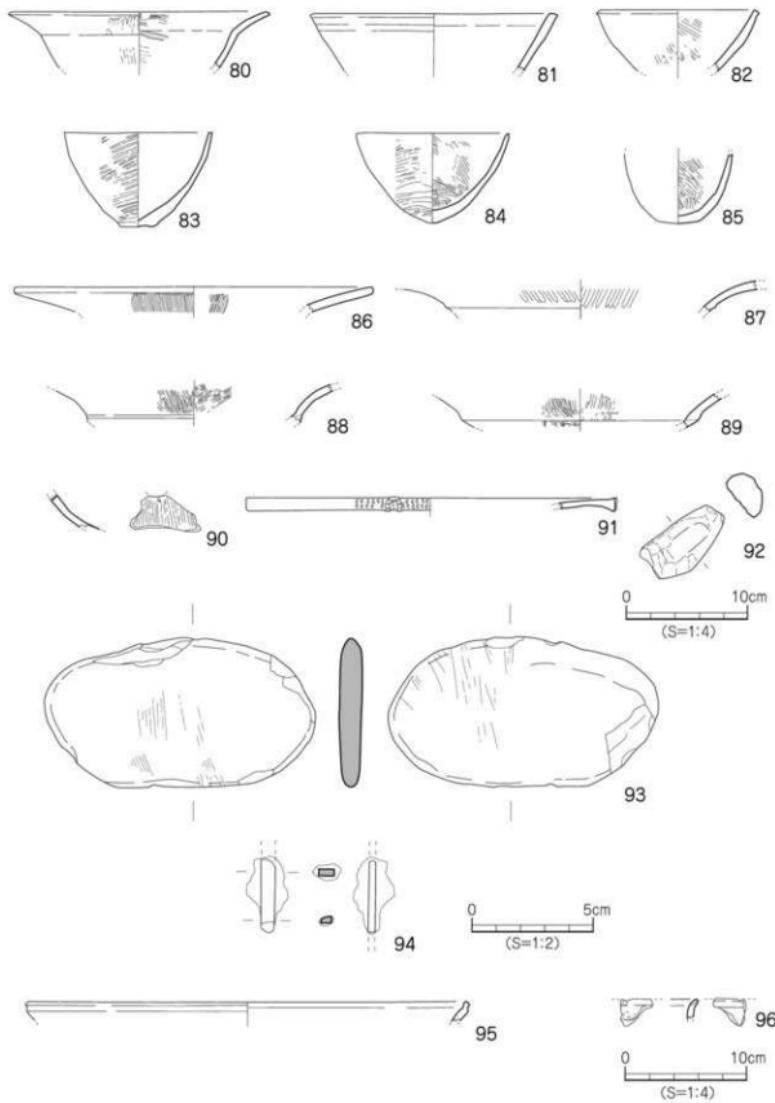
鉄製品 94は鉄鍔の茎部で、断面形は長方形を呈する。残存長3.15cm、幅0.3cm、厚み0.1cmを測る。

混入品 95・96は繩文の鉢である。95は短く外反する口縁部に、端部が上方にのび丸く納まる。96は口縁部は外反して、端部は丸くおさまる。95・96共に磨滅のため調整は不明である。

時期:出土した弥生土器の特徴から、本住居の埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。



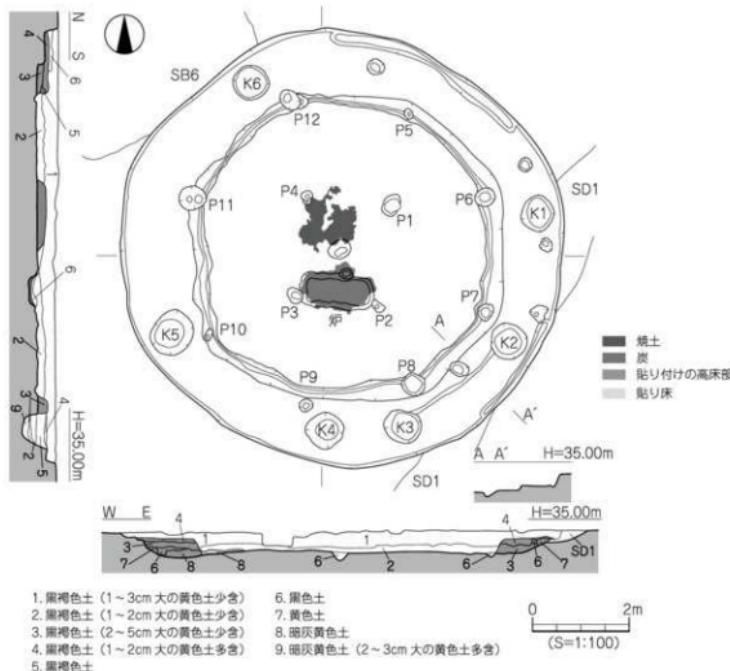
第14図 SB3出土遺物実測図 (1)



第 15 図 SB3 出土遺物実測図 (2)

SB4(第16図)

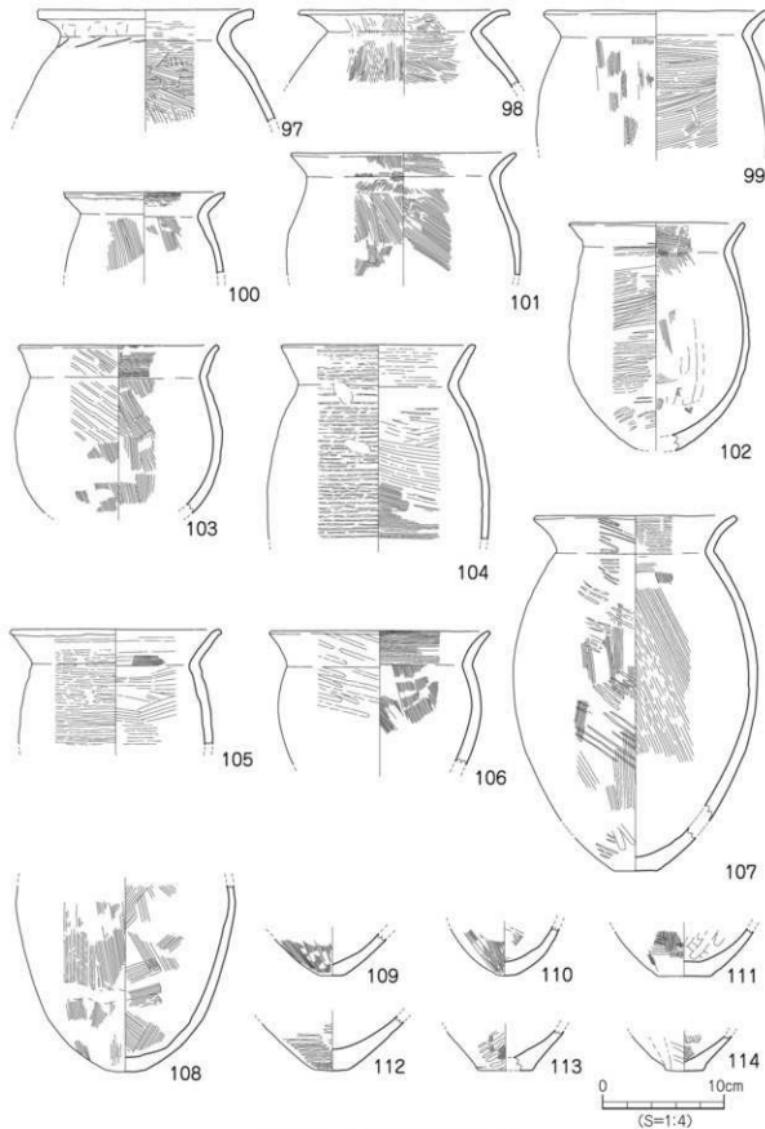
調査区中央部B～D・2～4区に位置し、SB6・SD1を切る。平面形態は八角形に近い円形を呈する。規模は東西9.1m、南北9.0m、深さ50cmを測る。内部施設は高床部、主柱穴、周壁溝、炉を検出した。高床部の外周は地山を削り出し、内側は黒褐色土に黄色土混じりを貼り付けて築造している。幅1.1～1.5m、基底面からの高さは25～35cmを測る。南東部の一辺は高床部と異なる地山を削り出した浅い段を2段もつ。また、北側の高床部には壁体に接するように甕(102)が下胴部を埋めて据えられた状態で検出した。主柱穴は高床部内側の角に8本(P5～P12)と住居中心部に4本(P1～P4)を検出する。外側の柱間は2.2～2.8m、直径20～40cm、深さ32～47cm、内側の柱間は1.7～2.1m、直径15～33cm、深さ9～21cmを測る。外側・内側の主柱穴のうちP1・8・11から柱痕を確認した。周壁溝は壁体に沿って東西側で部分的に検出した。また、高床部と床面の境でも溝を検出している。炉は建物の中央部南側のP2とP3間で検出した。平面形態は長方形で、断面形態は逆台形状を呈し、炉床全体では炭を検出した。炉の規模は長軸1.5m、短軸0.7m、深さ22cmを測る。南側の高床部を中心として平面形態が円～楕円形、断



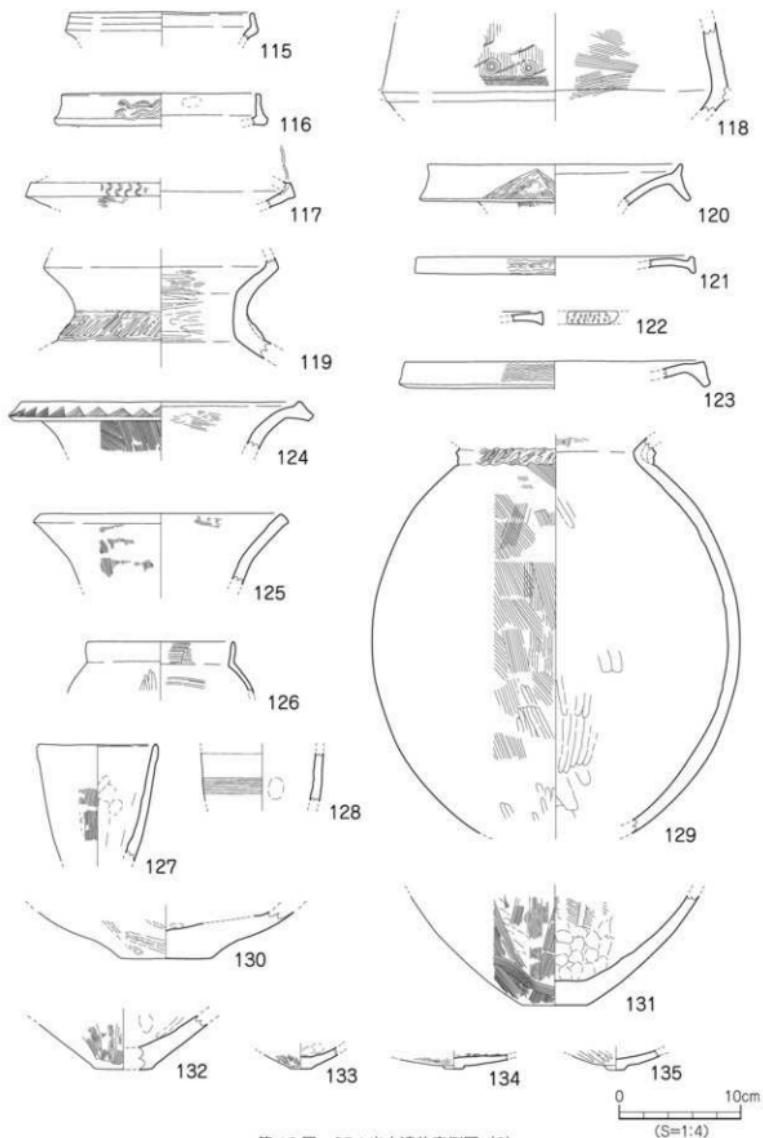
面形態が逆台形～方形状の掘り込みを高床部上面で6基(K1～K6)検出した。いずれも高床部の内側を巡る主柱穴に隣接してある。規模は直径60～90cm、深さ42～58cm、掘り込みの間隔は1.6～5.3mを測る。埋土は黒褐色土であり、K5からは床面から浮いた状態で壺形土器・鉢形土器・支脚形土器などの弥生土器が出土する。建物内の埋土は黒褐色土に1～3cm大の黄色土が少し混じる。遺物は中央部の焼土付近にやや多く、ほとんどの土器が床面より浮いた状態で出土し、石皿は北西部の床面に据えられていた。器種は弥生土器の壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高壺形土器・支脚形土器・器台形土器・壺形土器や石製品・鉄製品・種子が出土する。

出土遺物(第17～20図)

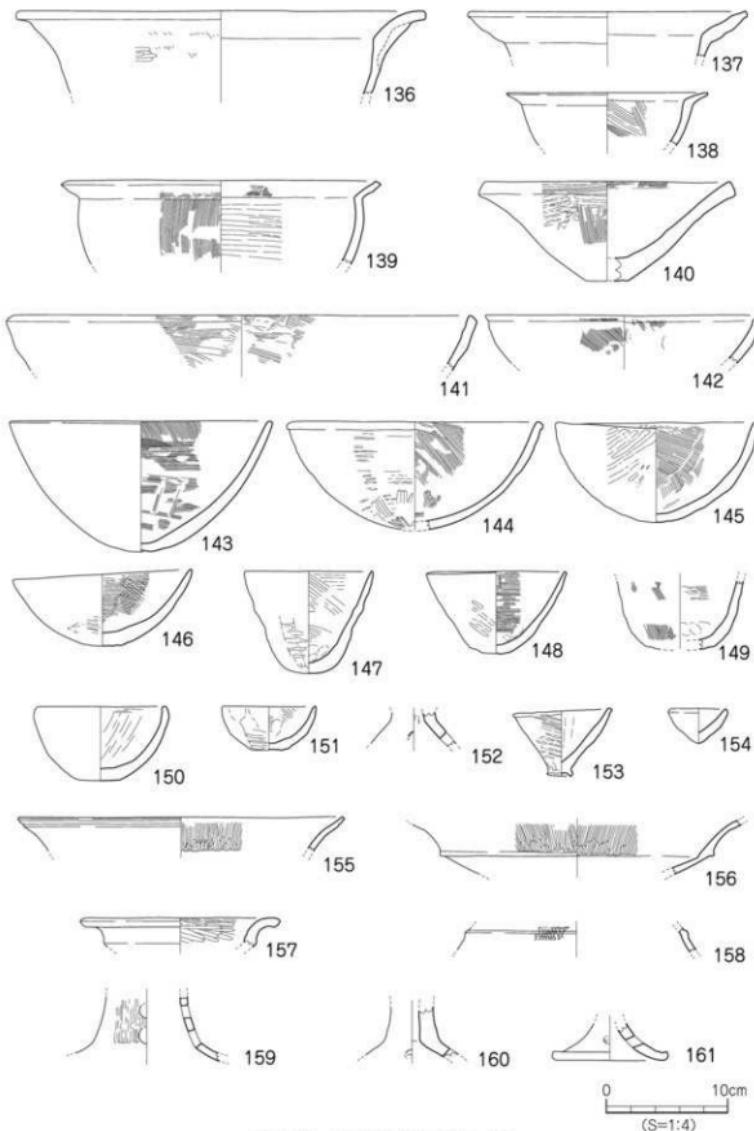
97～172は弥生土器である。97～114は壺形土器で、97は外反する口縁端部は平らな面をなし、外面頸部に「ノ」字状の刻み目をもつ。98は「く」字状の口縁部に端部は外方にのびる。99～101は緩やかな「く」字状を呈した口縁部をもつ。98～100は胴部の内外面にハケメ調整が施される。101～107は緩やかな「く」字状の口縁部に、張りの弱い胴部をもち、102～107は胴部外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施される。108～113は平底の底部から内湾気味に立ち上がり、108～110は外面にハケメ調整が施される。111～113は外面にタタキ調整、内面にはナデ調整が施される。114は外面にタタキ調整、内面にはミガキ調整とハケメ調整が施される。115～135は壺形土器で、115は内傾する拡張部をもち端部は丸くおさまる。116は直立気味に内傾する拡張部に5条の波状文が施される。117は口縁端部に「S」字状の半截竹管文が施される。118は内傾する拡張面に二重円のスタンプ文様が2列分施され、外面にミガキ調整、内面にはハケメ調整が施される。119は頸部に貼付け凸帯をもつ。120～124は口縁部が大きく外反している。120は外反する口縁部に端部は上下方に拡張され、拡張面に斜めの櫛描き文が施される。121は口縁端部が上下方に拡張され、拡張面に波状文が4条施される。122は口縁端部が上下方にやや肥厚され、端部に半截竹管文が2列施される。123は下方に拡張された拡張面に8条の波状文が施される。124は口縁端部が外下方に拡張され、拡張面に鋸歯文が施される。125は外反する口縁部に端部は平らな面をなす。126は内湾する胴部外面にミガキ調整が施される。127は外傾気味の頸部外面にハケメ調整、内面にはナデ調整が施される。128は直立気味の頸部に10条の沈線が施される。129はやや長脚な球状の胴部に、頸部は貼付け凸帯をもち、外面下胴部にハケメ調整後ミガキ調整、内面にはナデ調整が施される。130～133は平底の底部から内湾気味に立ち上がる。130は大きく内湾して立ち上がる外面底部付近にミガキ調整が施される。131～133は外面にハケメ調整が施される。134・135はボタン状に突出した平底の外面底部付近にミガキ調整が施される。136～154は鉢形土器で、136は口縁部が外反し、頸部外面に粘土を貼り付けて肥厚する。137は外反する口縁部の内面に稜をもつ。136・137は内外面にナデ調整が施される。138・139は内湾する胴部に口縁部が外反する。140～151は直口口縁である。140は平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部付近がやや外反し、端部は平らな面をなす。外面にタタキ調整後ハケメ調整が施される。141は大型品である。142は内湾気味の口縁部に端部はやや外反する。143～146は内湾する胴部から口縁部である。144～146は外面にタタキ調整後ナデ調整、内面にはハケメ調整を施す。147・148はやや丸みのある平底の底部から外傾して立ち上がり、外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整が施される。149はやや凹凸のある底部から内湾気味に立ち上がる。150は平底の底部から内湾して立ち上がり、口縁端部がやや内傾する。151は平底の底部から内湾して立ち上がり胴部外面に稜をもち、外面にタタキ調整後ナデ調整、内面にはハケメ調整が施される。152は「ハ」字状の頸部に円孔が穿けられる台



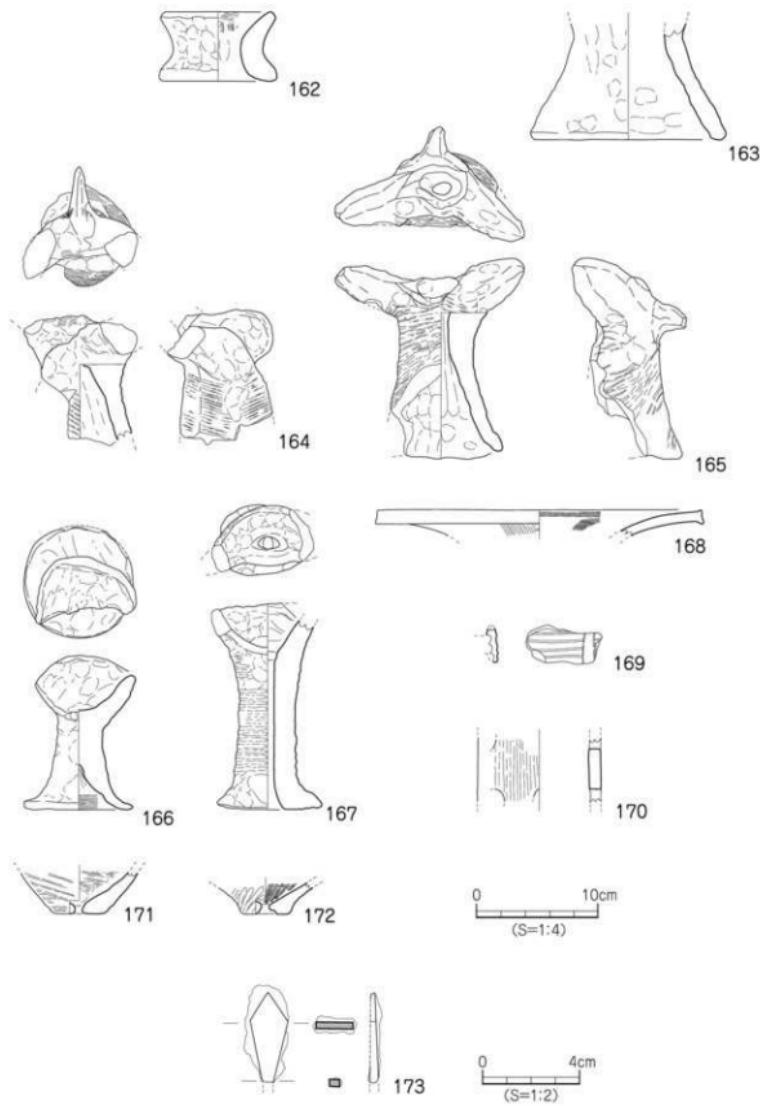
第17図 SB4出土遺物実測図(1)



第18図 SB4出土遺物実測図(2)



第19図 SB4出土遺物実測図(3)



第20図 SB4出土遺物実測図(4)

付鉢である。153・154はミニチュア品である。153は上げ底の底部付近は括れをもち外傾して立ち上がり、外面にタタキ調整、内面にはナデ調整が施される。154は底部が尖る。155～161は高環形土器で、155は外反する口縁部に2条の沈線が巡り、内面にはミガキ調整が施される。156は外反する口縁部の下方に稜がつく。口縁部の内外面に丁寧な縱方向のミガキ調整が施される。157は大きく外反する口縁部の下方に稜がつき、内面に横方向のミガキ調整が施される。158は「ハ」字状の脚部に半截竹管文が「S」字状に施される。159・160は緩やかな棱をもち「ハ」字状を呈する脚部に円孔が穿けられる。159は外面に縱方向のミガキ調整が施される。161はラッパ状に広がる脚裾部に円孔が穿けられ、端部は丸く納まる。162～167は支脚形土器で、162は中空の柱状で器壁が厚く、内外面にナデ調整が施される。163は「ハ」字状に外傾する底部の内外面にはナデ調整が施される。164・165は受部に突起を2個、背部に小さい把手1個をもつ。外面は把手部にナデ調整、脚部にタタキ調整、脚部内面にはナデ調整が施される。166・167は柱状の胴部に受部は斜めにカットされる。166は中実でナデ調整、167は中空でタタキ調整が施される。168～170は器台形土器で、168は大きく外反する口縁部に端部はやや凹み、口縁部外面は縱方向のミガキ調整、内面にはハケメ調整が施される。169は上下に拡張される口縁部の端面に3条の凹線があり、縦長の棒状貼文がつく。170は円柱の胴部に円孔が穿けられ外面はミガキ調整、内面にはハケメ調整が施される。171・172は瓶形土器で、平底の底部に円孔が穿けられる。外面はタタキ調整、内面は171がナデ調整、172はハケメ調整が施される。

鉄製品 173は有茎式鉄鎌で、茎部は欠失する。鎌身部は柳葉形で、全体は錆で覆われている。茎欠失部の断面形は四角形である。長さ3.97cm、鎌身部の幅18cm、厚さ0.75cmを測る。

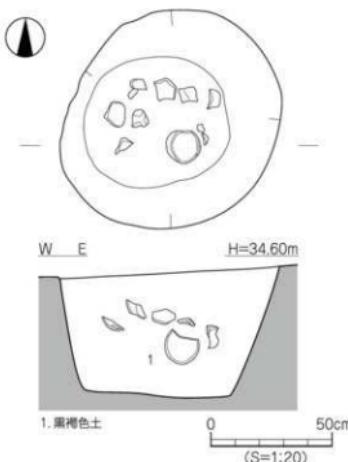
時期：出土した弥生土器の特徴から、本住居の埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。

SB4内K5(第21図)

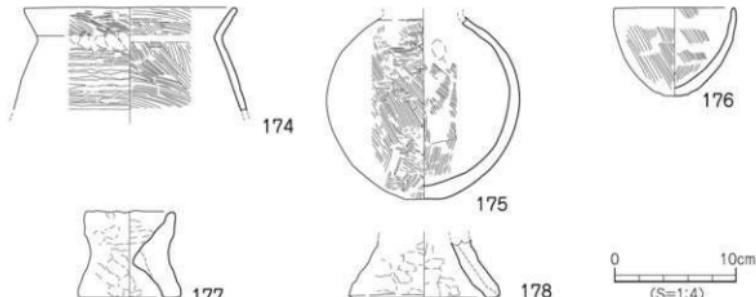
SB4内の西南部の高床部上面にて検出した。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は東西0.89m、南北0.92m、深さ48cmを測る。埋土は黒褐色土で、中位から壺が立てられた状態で検出され、弥生土器の壺形土器・鉢形土器・支脚形土器などが出土する。

出土遺物(第22図)

174～178は弥生土器である。174は壺形土器で、「く」字状の口縁部に張りの弱い胴部をもち、胴部外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整を施す。175は壺形土器で、平底の底部に球状の胴部で、外面は上胴部にハケメ調整、下胴部にタタキ調整、内面にはハケメ調整を施す。176は鉢形土器で、僅かに残る平底の底部から内湾して立ち上がり、内外面にはハケメ調整を施す。177・178は支脚形土器で、177は外傾する受部は尖り気味である。178は「ハ」字状に外傾する底部で、内外面にはナデ調整を施す。



第21図 SB4内K5測量図



第22図 SB4内K5出土遺物実測図

SB5(第23図)

調査区東北部E～F・1～3区に位置し、SB7・SD1・SK4を切り、SK3に切られる。東半は調査区外に延びる。平面形態は六角形に近い円形を呈する。検出規模は東西5.0m、南北7.1m、深さ30cmを測り、推定直径は7mになる。内部施設は高床部、主柱穴、周壁溝を検出した。高床部の内側は残存状況から不等辺な六角形状を呈するものと考えられ、暗褐色土や黒褐色土・黒色土などを貼り付けて構築しており、幅1.0～1.1m、基底面からの高さ4～8cmを測る。周壁溝は高床部内側の床面において検出し、幅5～7cm、深さ3～5cmを測る。主柱穴は高床部の角付近より5本分(P1～P5)を検出し、直径20～30cm、深さ30～45cmを測る。建物内では全域において、上面から床面にかけて焼土と炭化材が密集した状態で検出した。また、炭化した板材が高床部内側の壁体に貼り付いた状態で、厚み5mm、幅9cm、長さ1.2mを検出した。住居内の埋土は黒褐色土である。遺物は建物全体から散在して出土したが、ほとんどが床面より浮いた状態で焼土や炭に混じって出土する。器種は弥生土器の壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高壺形土器・器台形土器・支脚形土器や石製品・鉄製品が出土する。また、床面から調査区外に延びる平面形態がやや不整な円形状の浅い掘り込みを検出した。規模は東西13m、南北5m、深さ13cmを測り、埋土は黒褐色土に黄色土が混じり、遺物は弥生土器の小片が僅かに出土する。

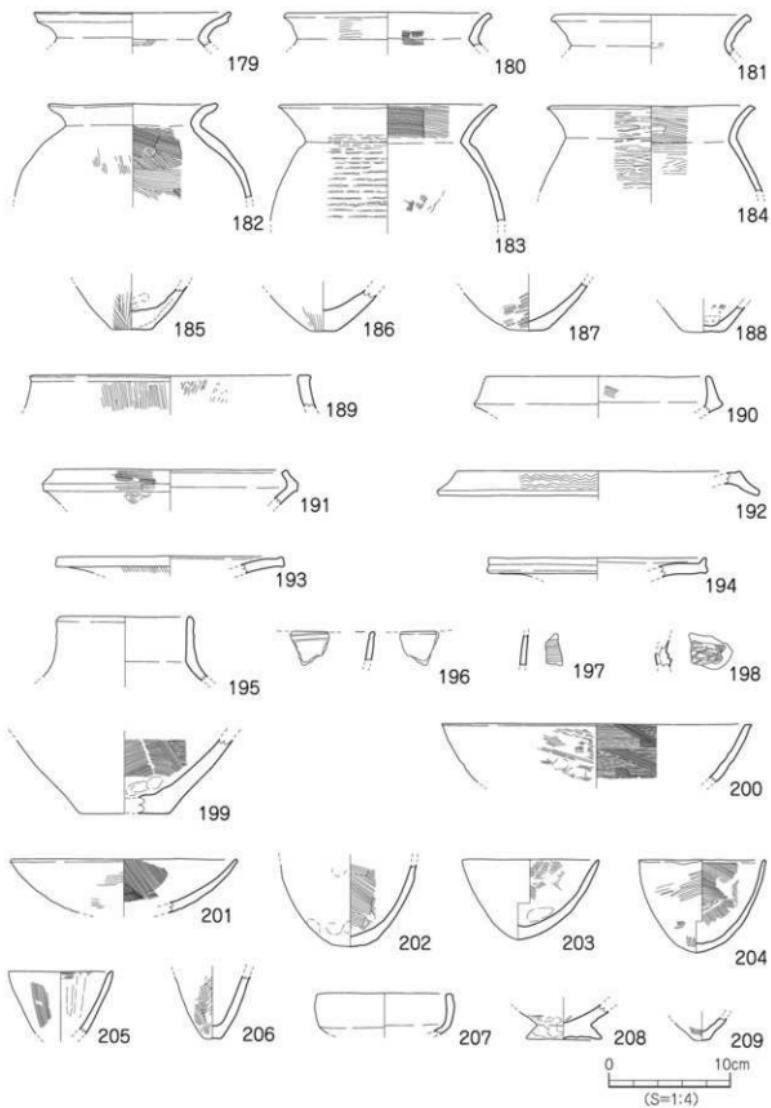
出土遺物(第24・25図)

179～218は弥生土器である。179～188は壺形土器で、179は外反する口縁端部がやや上方にのみ丸く納まり、内外面にはナデ調整を施す。180・181は「く」字状に外反する口縁部で、端部は平らな面をなす。182は肩部が強く張り、外反する口縁端部は丸くおさまり、内外面の口縁部にナデ調整、胴部にはハケメ調整を施す。183は「く」字状、184は緩やかな「く」字状の口縁部で、外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整を施す。185～188は平底で、185・186は外面にハケメ調整、187は外面にタタキ調整を施す。188は内面に指頭痕がある。189～199は壺形土器で、189～191は複合口縁壺の拡張部である。189は内傾する拡張部をもち、端部は水平な面をなす。190は内傾し、拡張部は断面三角形を呈する。191は短く内傾する拡張部をもつ。192は口縁端部が外下方にのび、拡張部には5条の波状文が施される。193は大きく外反する口縁部の端部に鋸歯文が施され、口縁部外面にはミガキ調整を施す。194は口縁端部がやや上方に肥厚される。195～197は長頸壺で、195は直口口縁をもつ。196は直立気味の口縁部に2条の沈線が施される。197は頸部片で13条の沈線が施される。198は頸

部に斜格子文の刻目凸帯をもつ。199は平底の底部で大型品である。200～209は鉢形土器で、200・201・203～205・207は直口口縁である。200・201は内湾して立ち上がる胴部をもち、200は内外面にハケメ調整、201は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整を施す。202は丸みをもつ底部から内湾しながら立ち上がる。203・204は尖り気味の底部をもつ。204は外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整を施す。205・206は胴部が外傾して立ち上がり、外面にハケメ調整を施す。207は胴部に緩やかな稜をもち、口縁部は直立気味に立ち上がり、内外面に横ナデ調整を施す。208は底部に「く」字状に突出する高台をもつ。209はミニチュア品で、平底の底部をもつ。210～213は高壺形土器で、210・211は壺部外面に稜をもち、210は内外面に縦方向のミガキ調整を施す。212は大きく外反する脚据部に円孔と、裾端部に刻目文・竹管文がある。213は内傾して立ち上がる脚部に円孔がある。214・215は支脚形土器で、214は中実で、やや上げ底の底部をもつ。215は受部に突起2個をもち、脚部上端に円孔がある。



第23図 SB5測量図



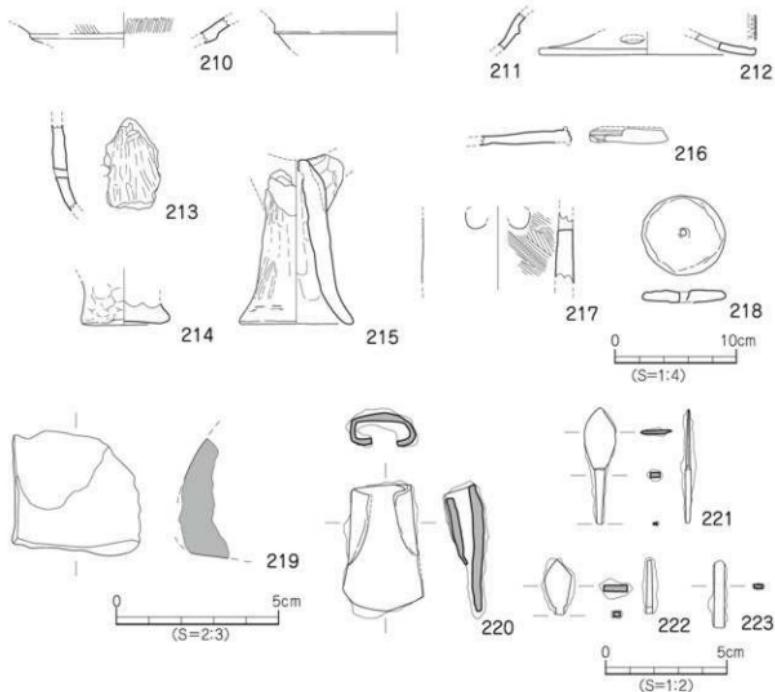
第24図 SB5 出土遺物実測図 (1)

216・217は器台形土器で、216は水平にのびる口縁部の端部に沈線文が施され、口縁部内面にはミガキ調整を施す。217は直立する円筒状の胴部をもち、円孔が穿けられる。外面にミガキ調整、内面にはハケメ調整を施す。218は紡錘車である。円形で、中央部に焼成前の円孔が穿けられる。両面にナデを施す。

石製品 219は砥石の一部である。残存する3面のうち2面には砥面がみられ、他の1面には線条痕が多数あり、焼成を受けた黒ずみがみられる。石英粗面岩製。

鉄製品 220は袋状鉄斧である。全長は5.6cm、袋部端の幅は2.6cmで、刃部に向かい徐々に幅を広め、刃部の幅は3.3cmである。袋部は閉じていなく、刃は弧状で小型品である。221～223は鉄鎌である。221は有茎式鉄鎌の完成品で、鎌身部は柳葉形である。茎部は断面四角形で、長さ4.7cm、鎌身部の幅1.3cm、茎部の幅0.6cmを測る。222は有茎式鉄鎌で、鎌身部は柳葉形、茎部は欠失する。茎部の断面形は四角形で、残存する長さ2.3cm、幅1.35cm、茎部の幅0.4cm、厚み0.3cmを測る。223は茎部で、断面形が四角形、残存長さ2.75cm、幅0.5cm、厚み0.2cmを測る。

時期：出土した弥生土器の特徴から、本住居の埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。



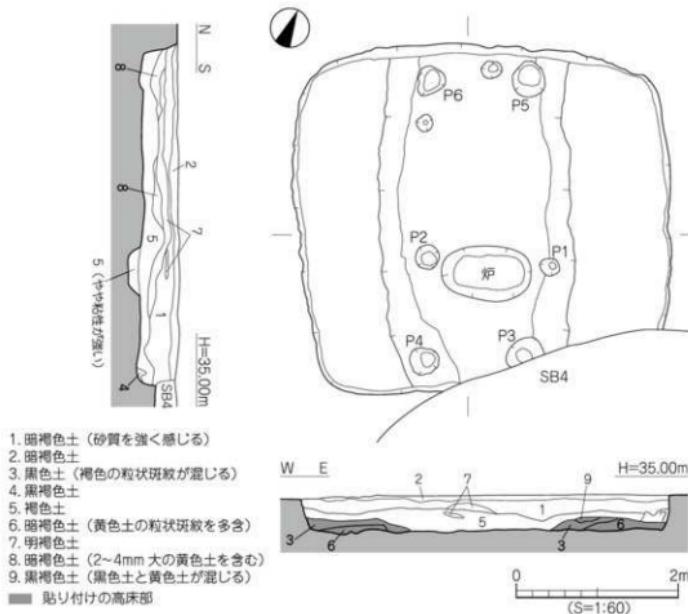
第25図 SB5出土遺物実測図(2)

SB6(第26図)

調査区北側B～C・1～3区に位置し、SB4に切られる。平面形態は方形を呈する。規模は東西4.6m、南北4.3m、深さ46cmを測る。内部施設は高床部、主柱穴、炉を検出した。高床部は黒褐色土に黄色土の混じりを貼り付けて、東壁側と西壁側の2ヶ所に構築している。規模は幅1.0～1.2m、基底面からの深さ10～15cmを測る。主柱穴は中央部南側で2本(P1・P2)を検出した。規模は直径20～30cm、深さ22～40cmを測る。P1・P2の北側に対応する柱穴はなく、南北壁際際に2本ずつ深さ5～13cmの浅い柱穴(P3～P6)を検出した。炉は中央部南側の主柱穴の間で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面において炭の堆積を確認した。規模は長軸1.1m、短軸0.7m、深さ14cmを測る。住居内の埋土は上層が暗褐色土で、下層は黒褐色土である。遺物は建物全体から散在して出土したが、ほとんどが床面より浮いた状態で出土しており、器種は弥生土器の壺形土器・壺形土器・高环形土器・鉢形土器・支脚形土器・器台形土器が出土する。

出土遺物(第27・28図)

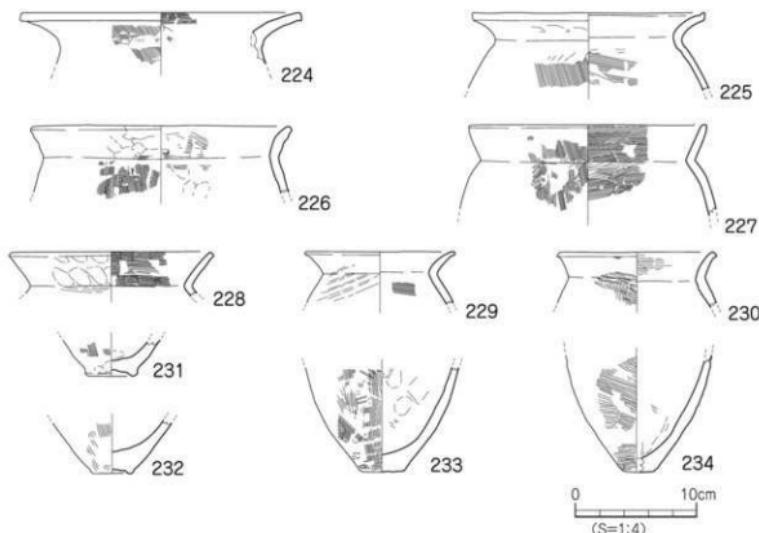
224～258は弥生土器である。224～234は壺形土器で、224は口縁部が大きく外反し、端部は平らな面をなす。225は外反する口縁部の端部が上方にやや肥厚され、内外面にはハケメ調整を施す。226は張りのない胴部から、口縁部が緩やかに外反し、内外面にはハケメ調整を施す。227は外傾する口縁部をもち、外面にタタキ調整後ハケメ調整、内面にはハケメ調整を施す。228・229は「く」字状の口縁部



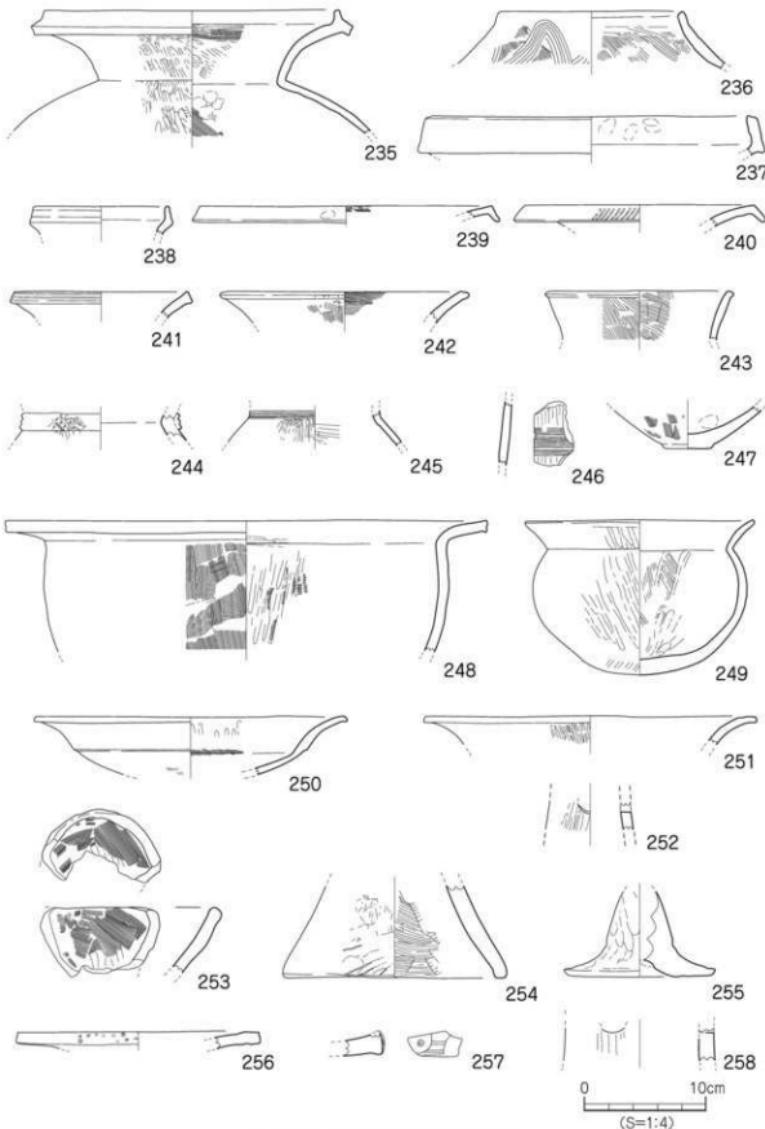
第26図 SB6測量図

で、228は端部に平らな面をなし、口縁部の外面にナデ調整、内面にはハケメ調整を施す。229は胴部外面にタタキ調整、内面にはハケメ調整を施す。230は緩やかに外傾する口縁部の端部は外下方にやや肥厚され、外面にタタキ調整後ハケメ調整、内面にはハケメ調整を施す。231・232はやや上げ底の底部をもつ。233・234は平底の底部をもち、外面にはタタキ調整を施す。235～247は壺形土器で、235は外反する口縁部に上方にのびる拡張部をもち、口縁部の外面にはハケメ調整後ミガキ調整を施す。236は湾曲する拡張部に波状文が施される。237・238は内傾する拡張部をもち、端部は、237は平らな面をなし、238は丸く納まる。239・240は大きく外反する口縁部に、端部は外下方に拡張され、240は拡張面にヘラ状工具による刻みが施される。241・242は外反する口縁部に、241は2条の沈線文が巡り、242は口縁端部が平らな面をなす。243は外傾してのびる直口口縁をもち、端部は外方にやや肥厚する。244は貼付凸帯に斜格子状の刻み目がつく。245は頸部に4条の櫛描き沈線文が巡り、上胴部外面にミガキ調整を施す。246は直立する頸部に13条の沈線文が巡り、頸部外面にはミガキ調整を施す。247は平底の底部をもつ。248・249は鉢形土器で、248は大型品で、外反する口縁部をもつ。外面にハケメ調整、内面にはハケメ調整後ミガキ調整を施す。249は球状の胴部に、口縁部は外反し、外面にミガキ調整、内面にはハケメ調整後ミガキ調整を施す。250～252は高壺形土器で、250・251は口縁部が外反し、250は坏部に稜をもつ。252は脚に円孔が穿けられる。253～255は支脚形土器で、253は受部の断面形が「U」字状を呈し、外面はタタキ調整後ナデ調整を施す。254は「ハ」字状の脚部である。255は脚裾部が大きく広がる。256～258は器台形土器で、256は口縁端部に竹管文が施される。257は口縁端部に3条の沈線文と円形浮文が施される。258は直立する胴部に円孔が穿けられる。

時期：出土した弥生土器の特徴から、本住居の埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。



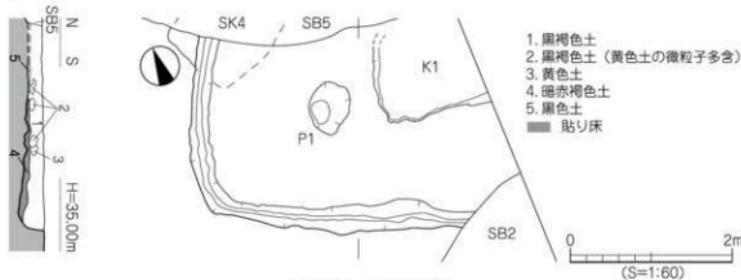
第27図 SB6出土遺物実測図(1)



第28図 SB6 出土遺物実測図 (2)

SB7(第29図)

調査区東側E～F・3～4区に位置し、東半部は調査区外に延びる。SK4を切り、SB2・SB5に切られる。平面形態は方形を呈する。検出規模は東西4.0m、南北2.5m、深さ40cmを測る。内部施設は主柱穴、周壁溝、貼り床を検出する。主柱穴は1本(P1)を検出し、直径60cm、深さ59cmを測る。主柱穴の柱痕は貼り床上面で検出し、柱穴の掘り方は貼り床を掘り下げた後に検出した。周壁溝は壁体に沿って、規模は幅15～25cm、深さ5cmで巡る。貼り床は、建物内の南側で検出し、厚さ3～8cmを測る。住居内の埋土は黒褐色土で、貼り床部は暗赤褐色土である。また、建物の中央部付近の床面から調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面形態が方形、断面形態が皿状の遺構(K1)を検出した。埋土は黒色土で、遺物は弥生土器の小片がわずかに出土する。遺物は建物全体より散在して出土したが、殆ど床面より浮いた状態の出土である。器種は弥生土器の壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高壺形土器・支脚形土器や鉄製品が出土する。

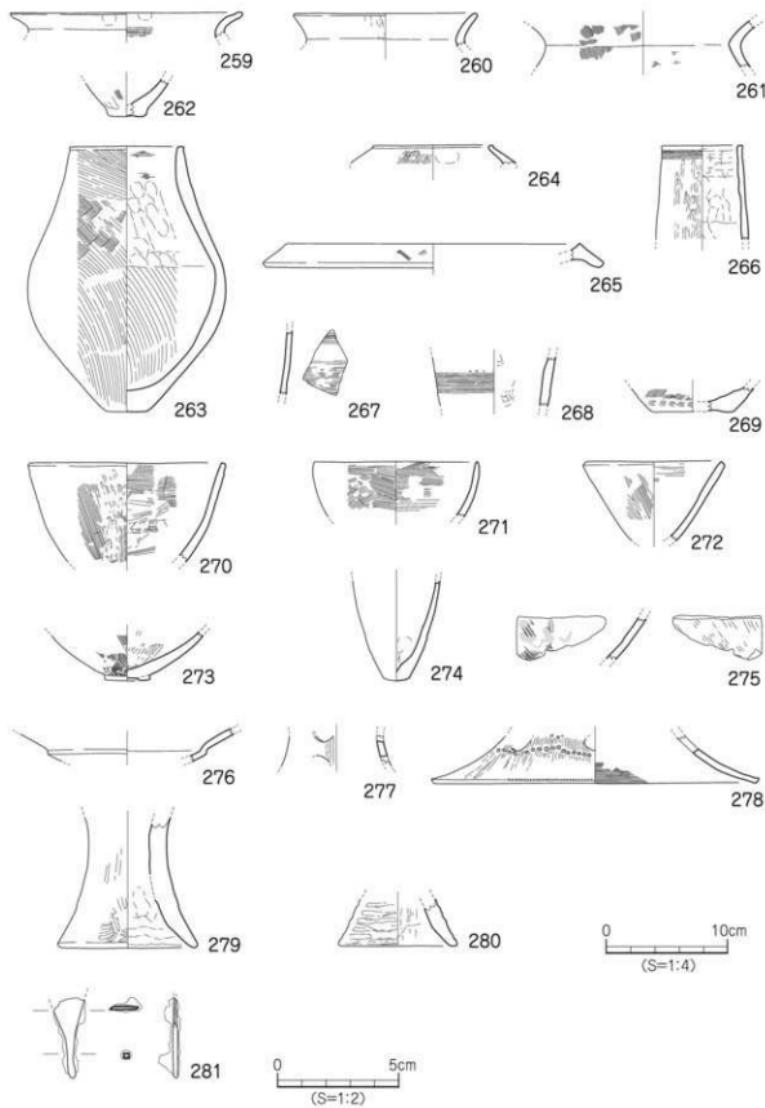


出土遺物(第30図)

259～280は弥生土器である。259～262は壺形土器で、259は緩やかに外反する口縁部をもち、外面には横ナデ調整を施す。260・261は「く」字状を呈する口縁部をもち、261は内外面にハケメ調整を施す。262は平底の底部である。263～269は壺形土器で、263は平底の底部で、内傾する長い頸部をもち、外面にハケメ調整、内面には上胴部にナデ調整、下胴部にハケメ調整を施す。264は複合口縁の拡張部で、外面にミガキ調整、内面には横ナデ調整を施す。265は外下方にのびる拡張部に鋸歯文が施される。266は直立する長い頸部をもち、端部には5条の沈線が巡る。外面にミガキ調整、内面にはハケメ調整後横ナデ調整を施す。267・268は直立する長い頸部に沈線が巡る。269は底部端に低い貼り付け高台をもち、底部外面には逆「コ」字状の刺突文が巡る。270～275は鉢形土器で、270～272は直口口縁である。270は外傾し、271は内湾して立ち上がり、外面にはハケメ調整を施す。272は外傾して立ち上がり、口縁端部は平らな面をなす。273は底部は貼り付けによる高台をもつ。外面にハケメ調整、内面にはミガキ調整を施す。274はやや丸みをもつ平底の底部である。275は外傾する胴部内面に朱が付着する。276～278は高壺形土器で、276は壺部外面に稜をもつ。277は脚柱部に円孔が穿たれ、外面にはミガキ調整を施す。278は脚部に円孔、竹管文、刻目文が施される。279・280は支脚形土器で、「ハ」字状の脚部は中空で、外面は279にミガキ調整、280にはタタキ調整を施す。

鉄製品 281は鉄鍔で、茎部から鍔身部の一部が残存する。

時期：出土した弥生土器の特徴から、建物の埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。



第30図 SB7出土遺物実測図

2) 溝

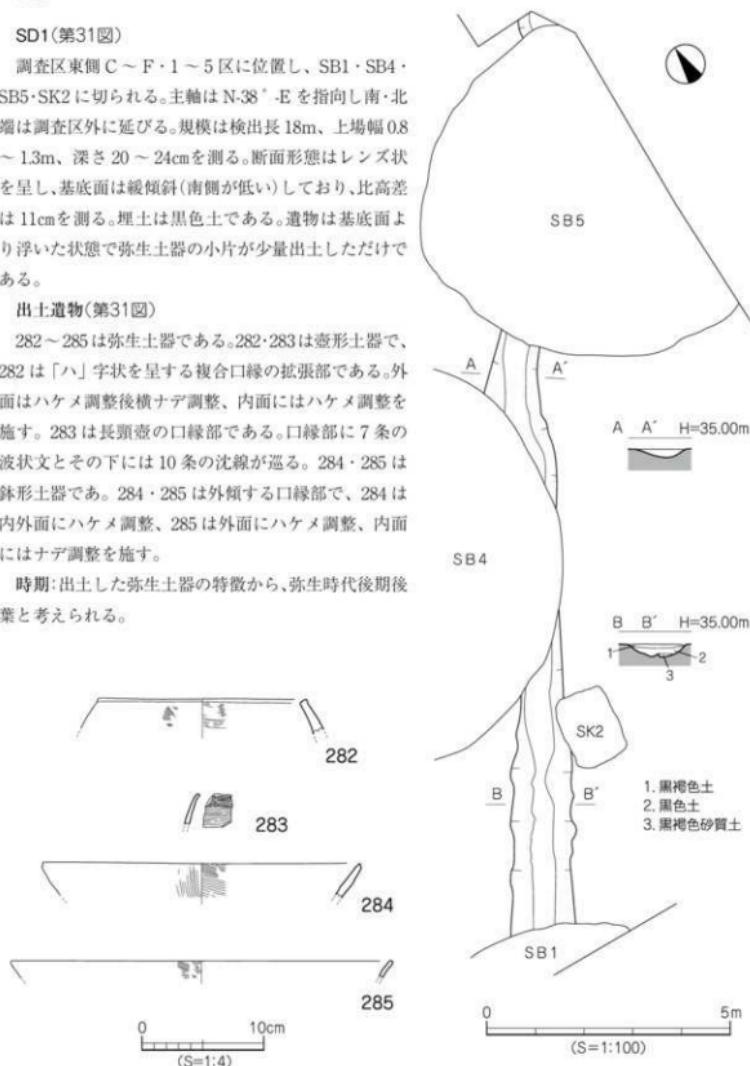
SD1(第31図)

調査区東側 C ~ F・1 ~ 5 区に位置し、SB1・SB4・SB5・SK2 に切られる。主軸は N-38°・E を指向し南・北端は調査区外に延びる。規模は検出長 18m、上場幅 0.8 ~ 1.3m、深さ 20 ~ 24cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、基底面は緩傾斜(南側が低い)しており、比高差は 11cm を測る。埋土は黒色土である。遺物は基底面より浮いた状態で弥生土器の小片が少量出土しただけである。

出土遺物(第31図)

282~285 は弥生土器である。282・283 は壺形土器で、282 は「ハ」字状を呈する複合口縁の拡張部である。外面はハケメ調整後横ナデ調整、内面にはハケメ調整を施す。283 は長頸壺の口縁部である。口縁部に 7 条の波状文とその下には 10 条の沈線が巡る。284・285 は鉢形土器である。284・285 は外傾する口縁部で、284 は内外面にハケメ調整、285 は外面にハケメ調整、内面にはナデ調整を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後葉と考えられる。



第31図 SD1測量図・出土遺物実測図

SD2(第32図)

調査区西側 A ~ B・1 ~ 4 区に位置し、SB3 に切られる。主軸は N-20°-W を指向し、南端は東方向に湾曲する。北端は調査区外に延びる。規模は検出長 10.8m、上場幅 0.5 ~ 0.9m、深さ 13 ~ 16cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、基底面は緩傾斜(北側が低い)し、北高差は 10cm を測る。埋土は黒色土である。遺物は基底面より浮いた状態で弥生土器の小片が少量と、縄文土器 1 点が出土した。

出土遺物(第32図)

286 は縄文土器の浅鉢で、混入品である。外反する口縁部の端部は上方に隆起し、内外面には横ナデ調整を施す(縄文時代晚期の土器)。

時期：SB3 との切り合いから弥生時代末以前の埋没と考えられる。

3) 土坑

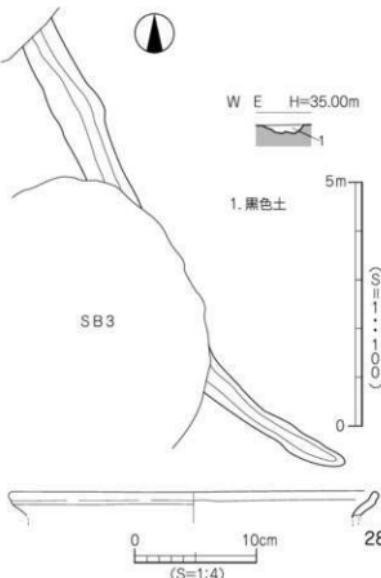
SK2 (第33図)

調査区南東部 D・4 ~ 5 区に位置し、SD1 を切る。平面形態は長方形、断面形態は方形を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 15m、短軸 1.2m、深さ 41cm を測る。埋土は上層が黒褐色土で、中層～下層は黒褐色土に黄色土が混じり、最下層は暗灰褐色土である。遺物は上～下層より弥生土器の小片が少量出土しただけで図化には至らなかった。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期末と考えられる。

SK3(第34図)

調査区北東隅 E・1 区の拡張部に位置し、SB5 を切る。平面形態は長方形、断面形態は方形を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 2.8m、短軸 1.5m、深さ 66cm を測る。埋土は上層が暗灰褐色土で、中～下層は黒褐色土に黄色土や明灰黄色土が混じる。遺物は上～下層より弥生土器の小片が少量出土する。



第32図 SD2測量図・出土遺物実測図

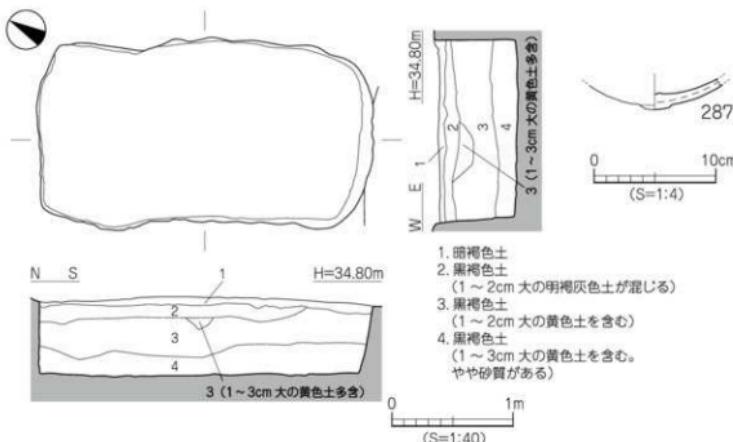


第33図 SK2測量図

出土遺物(第34図)

287は弥生土器の鉢の底部である。ボタン状の底部をもつ。

時期:出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期末と考えられる。



第34図 SK3測量図・出土遺物実測図

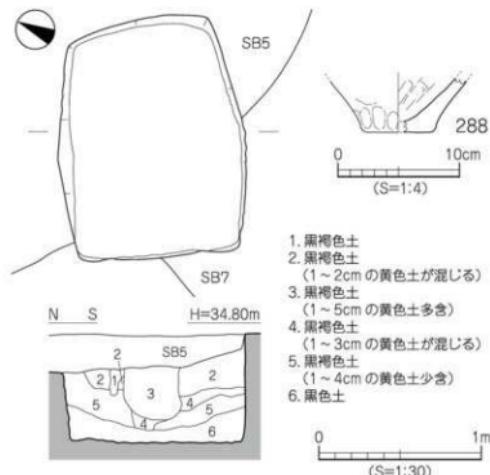
SK4(第35図)

調査区北東部E・3区に位置する。SB5の貼り付けの高床部の下、SB7の貼り床の下から検出した。平面形態は長方形、断面形態は方形を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.45m、短軸1.15m、深さ40cmを測る。埋土は上層～中層は黒褐色土や黑色土に黄色土が混じり、下層は黒色土である。遺物は上～中層より弥生土器の小片が少量出土する。

出土遺物(第35図)

288は弥生土器の壺である。平底の底部から内湾気味に立ち上がる。

時期:出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期前葉と考えられる。



第35図 SK4測量図・出土遺物実測図

(2) 近世

1) 土坑

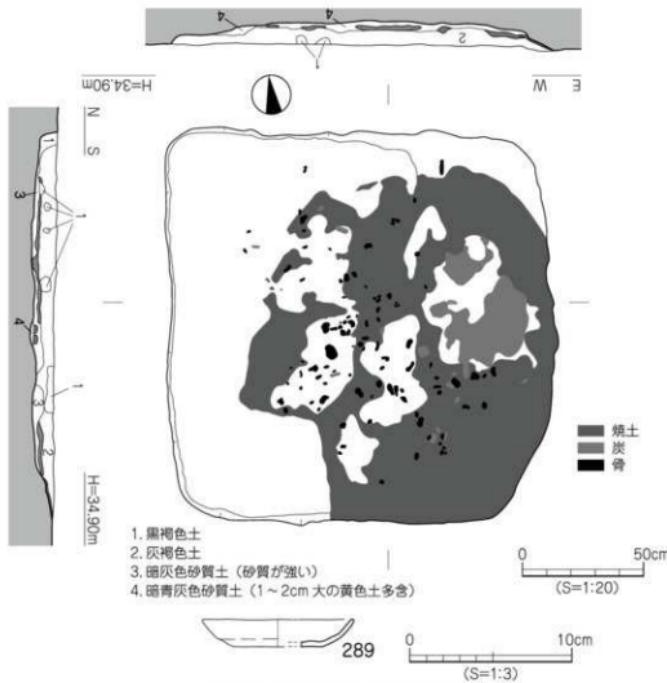
SK1(第36図)

調査区東南部 E・4 ~ 5 に位置し、SB2 を切る。平面形態は隅丸方形、断面形態は皿状を呈する。規模は一辺が 1.6m、深さ 11cm を測る。上層から下層にかけて炭化材を検出し、炭化材に混じり骨の小片が下層から少量出土している。中央部付近から南東部にかけて壁体から下層上面にかけ焼土の堆積を検出した。焼土の範囲は東西 1.3m、南北 1.4m、厚み 3 ~ 5cm を測る。埋土は上層が灰褐色土で、下層は暗青灰色砂質土である。遺物は上層に散在した状態で、焼土・炭に混じって出土し、器種は土師器皿や陶器・瓦の小片が少量出土する。

出土遺物(第36図)

289 は中世の土師器皿である。平底の底部から外面に稜をもち内湾気味に立ち上がり、内外面は横ナデ調整を施し、底部には回転糸切り痕がある。

時期：出土した陶器・瓦片から近世と考えられるが、詳細な時期は判断できない。



第36図 SK1測量図・出土遺物実測図

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄() : 復元推定値

調整 : 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、口端→口縁端部、拡→拡張部、受→受部、頸→頸部、把→把手部、胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、脚→脚部、脚裾→脚部裾、底→底部

胎土・焼成欄 : 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、密→精製土、金→金雲母、砂→砂粒

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。(単位: mm)

焼成の略記について。○→良好、○→良、△→不良。

表1 積穴建物一覧

積穴 (SD)	平面形	規 模 (m) 長さ(長径) × 幅(短径) × 深さ	埋 土	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	時 期	備 考
						高床	土坑	炉	カマド			
1	円 形	5.5 × 1.2 × 0.45	黒褐色土	4.43	○				○	弥生後期末	調査区外へ延びる。	
2	円 形	7.5 × 3.8 × 0.45	黒褐色土	22.52	3	○	○			○	弥生後期末	SK1に切られ、SB7を切る。
3	円 形	6.7 × 4.9 × 0.67	黒褐色土	27.10	3	○		○		○	弥生後期末	SD2を切る。
4	円 形	9.1 × 9.0 × 0.5	黒褐色土	31.79	12	○		○		○	弥生後期末	SB6-SD1を切る。
5	円 形	7.1 × 5.0 × 0.3	黒褐色土	27.79	5	○					弥生後期末	SB7-SD1-SK1を切り、SK3に切られる。
6	方 形	4.6 × 4.3 × 0.46	G1#D: 黒褐色土 G2#D: 黒褐色土	18.33	2	○		○			弥生後期末	SB4に切られる。
7	方 形	4.0 × 2.5 × 0.4	黒色土	8.96	1					○	弥生後期末	SK4を切り、SB2・5に切られる。

表2 積穴建物の炉一覧

積穴 (SD)	位置	平面形	規 模 (m) 長さ(長径) × 幅(短径) × 深さ		出土遺物	時 期	備 考
			高床	土坑			
3	中央部南寄り	隅丸長方形	1.1 × 0.7 × 0.13		弥生	弥生後期末	灰が堆積する。
4	中央部南寄り	長方形	1.5 × 0.7 × 0.22		弥生	弥生後期末	主柱穴に挟まれ、下層に灰が堆積する。
6	中央部南寄り	楕円形	1.1 × 0.7 × 0.14		弥生	弥生後期末	主柱穴に挟まれ、下層に灰が堆積する。

表3 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ(長径) × 幅(短径) × 深さ		方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
			南北	東西					
1	C~F・1~5	レンズ状	18.0 × 0.8 ~ 1.3 × 0.20 ~ 0.24	南北	黒色土	弥生	弥生後期後葉		SB1・4・5、SK2に切られる。
2	A-B・1~4	レンズ状	10.8 × 0.5 ~ 0.9 × 0.13 ~ 0.16	南北	黒色土	縄文 弥生	弥生末以前		SB3に切られる。

表4 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	E・4~5	隅丸方彌	皿状	1.6 × 1.6 × 0.11	2.50	④⑤灰褐色土 ④⑤青灰色砂質土	瓦・陶器 土器	近世	SB2を切る。
2	D・4~5	長方形	方形	1.5 × 1.2 × 0.41	1.66	黒褐色土	弥生	弥生後期末	SD1を切る。
3	E・1	長方形	方形	2.8 × 1.5 × 0.66	3.90	④⑥暗褐色土 黒褐色土	弥生	弥生後期末	SB5を切る。
4	E・3	長方形	方形	1.45 × 1.15 × 0.4	1.52	黒褐色土 黒色土	弥生	④⑦灰褐色土	SB5-7に切られる。

表5 SB1出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (190) 残高 39	口縁部は「く」字状を呈し、縐部はやや下方に拡張する。	①ヨコナデ	⑦ハケ (20本/cm)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~5) ○		
2	甕	口径 (136) 残高 30	「く」字状の口縁部をもつ。	マメツ	指頭痕	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~5) ○		
3	甕	残高 24	口縁部は外反し、縐部は「コ」字を呈す。	①ヨコナデ	⑦ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~4) ○	保付有	
4	甕	口径 (184) 残高 42	直立気味の縐部に口縁部は外反し、縐部は平らな面をなす。	ハケ (8本/cm)	マメツ	にぶい黄褐色 灰黃褐色	石・長 (1~2) ○		
5	甕	口径 (58) 残高 29	直立気味の縐部に口縁部は外傾し、縐部は平らな面をなす。(ミニチャウ)	①ヨコナデ	⑦ヨコナデ	褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ○		
6	鉢	口径 (230) 残高 22	口縁部はやや内汚気味に立ち上がり、縐部は平らな面をなす。	①ハケ (10本/cm) →ミガキ	⑦ハケ (10本/cm) →ミガキ	暗赤褐色 暗赤褐色	石 (1) ○		
7	鉢	口径 (212) 器高 90	底盤の底部から内汚して立ち上がる。	マメツ	⑦ハケ 7~10本/cm	褐色 明黄褐色	石・長 (1~3) ○		
8	鉢	口径 (139) 器高 71	平底の底部から内汚して立ち上がる。	タタキ	ハケ 5本/cm	褐色 浅黄褐色	石・長 (1~4) ○		

表6 SB2出土遺物観察表 (土製品)

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
9	甕	口径 (174) 残高 26	「く」字状の口縁部をもつ。	①ヨコナデ	⑦ヨコナデ	灰褐色 褐色	石・長 (1) ○		
10	甕	口径 (202) 残高 49	外傾する縐部に、外反する口縁部をもち、縐部は「コ」字状を呈する。	①⑩ハケ (14~15/cm)	①⑩ハケ (14~15/cm)	にぶい黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
11	甕	口径 (260) 残高 31	口縁部は外反氣味で、縐部は丸みをもつ。	①ハケ 5本/cm →ヨコナデ	①ハケ 4本/cm →ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ○		
12	甕	口径 (172)	口縁部は外反氣味で、縐部は丸みをもつ。	①ハケ 6本/cm	①ハケ 6本/cm	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
13	甕	口径 (170) 縐やかに外反する口縁部をもつ。	①⑩ハケ (10~12本/cm)	①⑩ハケ (9本/cm)	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~4) ○			
14	甕	口径 (200) 残高 50	外反氣味の口縁部をもつ。	①⑩タタキ (8本/cm)	①⑩ハケ (8本/cm)	にぶい褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		
15	甕	底径 24 残高 8.4	底盤の底部から内汚気味に立ち上がる。	ハケ (7本/cm)	指頭痕	赤褐色 明褐色	石・長 (1~4) ○		
16	甕	底径 (2.2) 残高 53	底盤の底部から内汚気味に立ち上がる。	タタキ	ハケ (11~13本/cm)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ○		
17	甕	底径 (2.4) 残高 5.4	底盤の底部から内汚気味に立ち上がる。	タタキ	ナデ・指頭痕	灰褐色 淡褐色	長 (1) ○		
18	甕	底径 (4.2) 残高 35	底盤の底部から内汚気味に立ち上がる。	タタキ	ハケ 9本/cm	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ○		
19	甕	口径 (206)	口縁部は外反し、縐部は下方に拡張され、5~6条の波状紋が施される。	ハケ 8~9本/cm	ハケ 6本/cm →ミガキ	明褐色 明褐色	石・長 (1~5) ○		
20	甕	口径 (9.6) 残高 27	内傾する拡張部をもつ。(複合口縁)	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
21	甕	口径 (130) 残高 27	外反する口縁部をもつ。	ナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石 (1~5) ○		
22	甕	頭部径 (118) 残高 26	頭部に半截竹管文が施される。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	長 (細小) ○		

SB2出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外) (内面)	釉 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
23	壺	残高 2.6	肩部に貝殻による刺突文が施される。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石(2) ○		
24	壺	底径(2.6) 残高 7.5	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ(11~12本/cm) ⇒ミガキ	ハケ(11~12本/cm) ⇒ミガキ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~5) ○		
25	壺	底径(4.8) 残高 2.1	底部中央がやや凹む。	ナデ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) ○		
26	壺	底径(3.8) 残高 2.6	平底の底部から外傾して立ち上がる。	ハケ(12本/cm)	指頭痕	褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) ○		
27	壺	底径(3.8) 残高 2.6	平底の底部から外傾して立ち上がる。	タタキ →ハケ(12本/cm)	ハケ(14本/cm) 指頭痕	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~3) ○		
28	壺	底径(3.5) 残高 2.2	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	タタキ	マメツ	黒褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		
29	壺	底径 3.7 残高 3.4	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	タタキ	マメツ	褐色 にぶい褐色	石・長(1~3) ○		
30	壺	底径 3.3 残高 3.1	やや丸みをもつ底部である。	タタキ	ナデ	にぶい褐色 黒褐色	石・長(1~3) 金○		
31	壺	底径 2.8 残高 2.1	やや上げ底で肥厚された底部。	マメツ	⇒指頭痕	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~2) ○		
32	壺	底径(3.4) 残高 2.4	基底部がつまみ出されている。	マメツ	指頭痕	にぶい褐色 浅黄色	石・長(1~2) ○	黒斑	
33	壺	底径(2.0) 残高 1.0	基底部がつまみ出されている。	ナデ	ハケ(8本/cm)	褐色 褐色	石・長(1) ○		
34	鉢	口径(23.6) 残高 5.8	口縁部は反り気味に緩やかに外反する。	ミガキ	⇒ミガキ	にぶい褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
35	鉢	口径(16.6) 残高 5.3	口縁部は緩やかに外反する。	マメツ	⇒ハケ(8本/cm) ⇒ミガキ	浅黄褐色 褐色	石・長(1~2) ○		5
36	鉢	口径(20.6) 残高 5.1	外傾する胸部に口縁部はさらに外反する。	⇒ヨコナデ	⇒ハケ(9本/cm) ⇒ミガキ	にぶい褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
37	鉢	口径(21.8) 残高 7.5	口縁部は緩やかに外反する。	⇒タタキ	⇒ハケ(9本/cm) ⇒ミガキ	にぶい褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
38	鉢	口径(41.5) 残高 6.8	口縁部は緩やかに外反する。(大型 6品)	ハケ(10~12本/cm)	ハケ(8~10本/cm)	褐色 にぶい褐色	石・長(1~4) ○		5
39	鉢	口径(16.5) 残高 3.5	内湾する胸部に外反する口縁部をもつ。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 褐色	石・長(1) ○		5
40	鉢	口径(13.8) 残高 12.9	内湾する胸部に口縁端部は上外方に 肥厚される。	⇒タタキ ⇒ハケ(9本/cm) ⇒ナデ	⇒ハケ(10本/cm) ⇒ハケ(10本/cm) ⇒ナデ	明褐色 褐色	石・長(1~6) 金○		
41	鉢	口径(21.0) 残高 10.8	内湾する胸部に口縁端部は平らな面 をなす。	⇒タタキ ⇒ハケ(10本/cm)	ハケ(10本/cm) ⇒ハケ(10本/cm)	浅黄褐色 淡黄色	石・長(1~2) ○		
42	鉢	底径 1.0 残高 6.5	僅かに残る底部から内湾気味に立ち 上がる。	タタキ	ハケ(6本/cm)	褐色 浅黄褐色	石・長(1~3) ○		
43	鉢	口径 4.7	僅やかに外傾する胸部。	指頭痕	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	長(1~2) ○		
44	鉢	底径(2.2) 残高 2.3	上げ底の底部をもつ。(ミニチュア)	指頭痕	指頭痕	褐色 黑色	石・長(1~3) ○		
45	鉢	口径 2.3	括れの上げ底をもつ台付鉢である。	マメツ	ハケ(10本/cm)	褐色 褐色	長(0.5) ○		
46	鉢	口径 2.0	台付鉢の脚部。円孔がみられる。	ナデ	しぼり痕	褐色 褐色	砂 ○		
47	高杯	口径(32.8) 残高 2.6	大きく外反する口縁部。	ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
48	高杯	口径(18.7) 残高 2.5	大きく外傾する口縁部。	ミガキ	ハケ(6本/cm)	褐色 暗灰色	密 ○	黒斑	
49	高杯	基部径(3.7) 残高 2.8	大きく外傾する口縁部。	ミガキ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~4) ○		
50	高杯	基部径(3.8) 残高 4.5	外下方にのびる脚部。	ハケ(5本/cm)	しぼり痕	褐色 灰褐色	石(1) ○		
51	支脚	底径(8.4) 残高 4.4	胴中位が彫れる。	指頭痕	ハクリ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~3) ○		
52	支脚	口径 6.8	断面横円形の角状の突起部。	指頭痕	ナデ	にぶい褐色	石・長(1~2) 金○		
53	支脚	口径 6.6	断面は扁平な横円形を呈した角状の 突起部。	ナデ	ナデ	褐色	石・長(1~3) 金○		

表7 SB2出土遺物観察表（鉄製品）

番号	器種	残存	法量				備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
54	鉄鏃	鋒欠損	3.83	1.6	0.4	3.21		5

表8 SB3出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
55	甕	口径(120) 底径 27 高さ 24.5	平底の底部から内溝して立ち上がり、口縁部は外反する。	① ハケ(12本/cm) ② タガキ	① ハケ(6本/cm) ② 指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) ○		5
56	甕	口径(216)	外反する口縁部に端部は上方にやや肥厚される。	① ハケ(7~8本/cm)	② ハケ(6本/cm)	橙色 橙色	石・長(1~5) ○		
57	甕	口径(16.4) 残高 3.2	「く」字状の口縁部に端部は下方にやや肥厚される。	① ハケ(12本/cm) →ミガキ	② ハケ(12本/cm) →ミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) ○		
58	甕	口径(238) 残高 37	外反する口縁部に端部は下方に肥厚される。	① ハケ(6本/cm)	② ハケ(6本/cm)	黒褐色 黒褐色	石・長(1~4) ○		
59	甕	口径(22.6) 残高 43	「く」字状の口縁部はやや外反する。	ハケ(6本/cm)	ハケ(4本/cm)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) ○		
60	甕	口径(19.4) 残高 3.7	「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。	ハケ(5本/cm)	ハケ(4本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○		
61	甕	口径(18.4) 残高 3.3	「く」字状の口縁部に端部は上方にのびる。	ハケ(10本/cm)	ハケ(10本/cm)	灰黃褐色 灰白色	石・長(1~2) ○		
62	甕	口径(17.9) 残高 5.9	「く」字状の口縁部に端部は上方にのびる。	タタキ	ハケ(12本/cm) →指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~3) 砂 ○		5
63	甕	口径(13.4) 残高 4.0	「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。	① ナデ ④ ハケ(10本/cm) タタキ	② ハケ(10本/cm)	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1~2) 金 ○		
64	甕	底径(18) 残高 5.8	底径の底部から内溝気味に立ち上がる。	マツツ	ナデ 指頭痕	黒褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○		
65	甕	底径(34) 残高 3.6	平底の底部から内溝して立ち上がる。	タタキ	② 指頭痕	赤褐色 灰白色	石・長(1) ○		
66	甕	残高 4.0	内溝気味に立ち上がる。	タタキ	② 指頭痕	明赤褐色 黑色	石・長(1~5) ○		
67	甕	底径 33 残高 2.6	平底の底部から内溝気味に立ち上がる。	タタキ	ナデ ② 指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~6) ○		
68	甕	残高 2.6	括張部に6~7本の波状文が施される。(複合口縁部)	マツツ	ハクリ	橙色 橙色	石・長(1~2) ○		
69	甕	口径(13.0) 残高 3.8	直立気味に内側する拡張部。(複合口縁部)	② ヨコナデ	② ヨコナデ	にぶい黄橙色 明赤褐色	石・長(1~4) 金 ○		
70	甕	残高 3.6	拡張部に波状文が施される。(複合口縁部)	② ハケ(12本/cm)	② ナデ	明赤褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ○		
71	甕	口径 22.6 残高 1.2	大きく外反する口縁部は平らな面をなす。	② ハケ(8本/cm)	② ハケ(8本/cm)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) 金 ○		
72	甕	口径(17.4) 残高 6.0	直立気味に外反する口縁部。	ハケ(5本/cm)	ハケ(5本/cm)	灰黃褐色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
73	甕	口径(8.2) 残高 3.5	直立気味に外側する口縁部。	② ハケ(5本/cm)	② ハケ(8本/cm)	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~3) ○		
74	甕	口径(12.4) 残高 1.8	直立気味に外反する口縁部外面に沈線が11条施される。	マツツ	ヨコナデ	橙色 橙色	青 ○		
75	甕	残高 2.8	直立気味に外側する口縁部外面に沈線が施される。	ミガキ	② 指頭痕	黒褐色 にぶい黄橙色	石(1) ○		
76	甕	頭部径(12.0) 残高 5.6	頭部に斜格子文の網目凸帯が貼り付く。	マツツ	② ハケ(9本/cm) 指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○		
77	甕	頭部径(12.2) 残高 5.3	外反気味の頭部。	② ハケ(7~8本/cm)	マツツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) ○		
78	甕	残高 3.5	上脣部に2条の継割が施される。	ミガキ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~4) ○		5
79	甕	口径(13.0) 残高 0.9	大きく外反する口縁部に端部は下外方にのびる。	ナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(2~3) ○		
80	鉢	口径(21.0) 残高 4.6	外側する脣部に口縁部は大きく外反する。	ミガキ	② ハケ(5本/cm) タタキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○		
81	鉢	底径(20.4) 残高 5.0	直立的に外側する口縁部に端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1~5) ○		
82	鉢	底径(12.6) 残高 4.9	内溝する脣部に口縁部は平らな面をなし、外方にやや肥厚される。	ミガキ	② ハケ(6本/cm) ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1) ○		

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
83	鉢	口径 11.8 底径 3.0 器高 7.7	平底の底部から内溝して立ち上がる。	タタキ	ナデ	浅黄褐色 浅橙色	石・長(4~5) ○		
84	鉢	底径(12.4) 器高 7.2	底部は突疣状である。	タタキ	ハケ(7本/cm)	にぶい橙色 灰褐色	石・長(1~3) ○		
85	鉢	底径(1.4) 残高 5.7	僅かな平底の底部から内溝して立ち上がる。	マメツ	ハケ(6本/cm)	にぶい黄褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		
86	高杯	口径(29.0) 残高 2.0	大きく外反する口縁部。	③ミガキ	⑧ハケ(8本/cm) →ミガキ	橙色 橙色	石・長(1) ○		
87	高杯	残高 2.5	大きく外反する口縁部。	③ミガキ	③ミガキ	にぶい橙色 橙色	石・長(1) ○		
88	高杯	残高 3.0	大きく外反する口縁部。	③ミガキ	③ミガキ	橙色 橙色	石・長(1) 金○		
89	高杯	残高 2.7	大きく外反する口縁部。	③ハケ(7本/cm) →ミガキ	③ミガキ	橙色 にぶい褐色	石(1) ○		
90	高杯	残高 3.0	穿孔が施される脚部。	⑤ミガキ	⑧ハケ(14本/cm)	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) ○		
91	器台	口径(30.0) 残高 1.1	口縁端部に口縁部が2列に施され、泄「口」字状の浮文がつく。	マメツ	④⑨ハケ(12本/cm) ③ミガキ	橙色 にぶい黄褐色	石(1) ○	5	
92	支脚	残高 7.0	断面積円形の角状の突起部。	指頭痕		にぶい黄褐色	石・長(1~2) ○		

表 9 S B 3 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
93	未成品	完存	緑色片岩	11.1	6.15	0.98	129.0		5

表 10 S B 3 出土遺物観察表 (鉄製品)

番号	器種	残存	法量				備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
94	鉄 鋼	茎部	3.15	0.3	0.1	0.99		5

表 11 S B 3 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
95	鉢	口径(36.0) 残高 2.1	外反する口縁部に端部は上方にのび、丸みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	石・長(1) 金○		
96	鉢	残高 2.2	内溝味味の上側部に口縁部は外反して丸みをもつ。(鉛文?)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石(1) ○		

表 12 S B 4 出土遺物観察表 (土製品) (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
97	甕	口径(17.5) 残高 9.2	内溝する上側部に口縁部は外反し、端部は平らな面をなす。	③ヨコナデ ⑩ハケ 5~8本	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) 金○			
98	甕	口径(16.8) 残高 6.0	「く」字状を呈し、外反する口縁部 残高 6.0	ハケ(6~7本/cm)	ハケ(5~7本/cm)	黄褐色 浅黃褐色	石・長(1~2) ○		
99	甕	口径(18.0) 残高 11.2	縞やかに「く」字状を呈し、口縁部 は外反する。	③ヨコナデ ⑩ハケ 5~8本	③ヨコナデ ⑩ハケ 6~7本/cm	橙色 橙色	石・長(1~3) ○		
100	甕	口径(13.1) 残高 6.7	縞やかに「く」字状を呈する口縁部 の端部に凹みがみられる。	①ナデ ⑨ハケ 7本/cm	②ナデ ⑨ハケ 7本/cm	褐色 黒褐色	長(2) ○		
101	甕	口径(18.4) 残高 10.1	縞やかに「く」字状を呈する口縁部 の端部は丸くおさまる。	ハケ ⑩~12本/cm	ハケ(8~12本/cm)	褐色 にぶい橙色	石・長(1~7) ○		
102	甕	口径(14.2) 残高 18.6	内溝する脇部に縞やかに「く」字状 を呈する口縁部をもつ。	③マメツ ⑨タタキ	ハケ 6~9本/cm タタキ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) ○	6	
103	甕	口径(16.0) 残高 13.8	内溝する脇部に縞やかに「く」字状 を呈する口縁部をもつ。	③タタキ ⑨ハケ 6本/cm	ハケ(8本/cm)	明赤褐色 黒褐色	石(1~2) ○		

S B 4出土遺物観察表 (土製品)

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎 土 焼	備考	図版
				外 面	内 面				
104	甕	口径 (154) 残高 160	内溝する胴部に緩やかに「く」字状を呈する口縁部をもつ。	タタキ	ハケ 6本/cm	黒褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~5) ○		
105	甕	口径 (170) 残高 92	内溝する胴部に緩やかに「く」字状を呈する口縁部をもつ。	タタキ	ハケ 5~6本/cm	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) ○		
106	甕	口径 (180) 残高 110	内溝する胴部に緩やかに「く」字状を呈する口縁部をもつ。	タタキ	ハケ 7~8本/cm	橙色 オリーブ黒色	長 (1) ○		
107	甕	口径 (163) 底径 35 器高 (29.5)	底平の底部から内溝して立ち上がり、口縁部は「く」字状を呈する。	タタキ→ ハケ 6本/cm	ハケ 5~7本/cm	黒褐色 明褐色	石・長 (1~5) 金 ○		
108	甕	底径 (18) 残高 153	底平の底部から内溝して立ち上がる。	ハケ 7~9本/cm	ハケ 5本/cm	にぶい褐色 橙色	石・長 (1~4) ○		
109	甕	底径 (16) 残高 35	底平の底部から内溝気味に立ち上がる。	ハケ (12~15本/cm)	マメツ	灰褐色 浅黄褐色	石・長 (1~4) ○		
110	甕	底径 (13) 残高 40	僅かに残る底平の底部から内溝して立ち上がる。	ハケ (9本/cm)	ハケ (7本/cm)	橙色 褐色	石・長 (1~3) ○		
111	甕	底径 (4.4) 残高 39	底平の底部から内溝して立ち上がる。	タタキ→ ハケ (12本/cm)	ナデ	褐灰色 にぶい黄褐色	石・長 (1~4) ○		
112	甕	底径 36 残高 45	底平の底部から内溝して立ち上がる。	タタキ	ナデ	明赤褐色 橙色	石・長 (1~3) ○		
113	甕	底径 (4.5) 残高 33	底平の底部から内溝して立ち上がる。	タタキ→ ハケ・ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~3) ○		
114	甕	底径 31 残高 29	底平の底部から若干のくびれを呈し、内溝気味に立ち上がる。	タタキ→ ナデ	④⑤ ミガキ ⑥ハケ 5本/cm	明赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~3) ○		
115	甕	口径 (150) 残高 20	口縁部は上方に抵張される。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 褐色	長 (1) ○		
116	甕	口径 (157) 残高 26	上方にのげる抵張部に5条の波状文が施される。(複合口縁式)	ヨコナデ	ナデ	黄褐色 暗灰色	石 (1~2) ○		
117	甕	口径 (21.3) 残高 21	内傾する抵張部の外面には、二重円のスクエア文様が2列分施される。(複合口縁式)	ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) ○		
118	甕	残高 6.6	内傾する抵張部の外面には、二重円のスクエア文様が2列分施される。(複合口縁式)	ミガキ	ハケ 5~6本/cm	橙色 明赤褐色	石・長 (1~4) ○	6	
119	甕	残高 8.2	頭部に貼付け凸帯をもつ。	マメツ	ヨコナデ	浅黄色 浅黄褐色	石・長 (1~4) 金 ○		
120	甕	口径 (20.6) 残高 34	外反する口縁部に端部は上下方に拡張され、抵張面に斜めの彫飾文様が施される。	④ ハケ 5本/cm	⑤ ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい黄色	石・長 (1~2) 金 ○	6	
121	甕	口径 (22.6) 残高 14	大きく外反する口縁部に端部は上下方に拡張され、抵張面に波状文が4条施される。	④ ハケ 10本/cm	ナデ	にぶい橙色 浅黄褐色	長 (1) ○		
122	甕	残高 1.1	大きく外反する口縁部に端部は上下方に肥厚され、手軸竹管文が2列に施される。	ナデ	③ ミガキ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~2) 金 ○		
123	甕	口径 (24.2) 残高 20	外反する口縁部に端部は下方に拡張され、抵張面に8条の波状文が施される。	④ ナデ	④ ナデ	橙色 褐色	石・長 (2~3) ○		
124	甕	口径 (22.4) 残高 4.1	外反する口縁部に端部は外下方に拡張され、抵張面に彫飾文様が施される。	④ ハケ (7本/cm)	④ ハケ (7本/cm) →ナデ	橙色 浅黄褐色	石・長 (1~2) 金 ○	6	
125	甕	口径 (20.8) 残高 5.9	外反する口縁部に端部は平らな面をなす。	④ ハケ 9~10本/cm	④ ハケ (10本/cm)	浅黄褐色 浅黄褐色	長 (1) ○		
126	甕	口径 (11.8) 残高 4.2	内溝する胴部に口縁部は直立気味に立ち上がり複雑。	マメツ	ハケ (7本/cm)	橙色 にぶい橙色	石 (1~2) 金 ○		
127	甕	口径 (9.6) 残高 9.6	外傾気味の頭部から口縁部は長い。頭部に貼付け凸帯をもつ。	④ ヨコナデ ⑤ ハケ 6本/cm →ミガキ	④ ヨコナデ ⑤ ハケ 10本/cm ナデ	褐色 褐色	長 (1) 金 ○		
128	甕	残高 4.0	直立気味の頭部に10条の旋線が施される。	④ ナデ	④ ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長 (1~2) ○		
129	甕	残高 32.4	やや長胴な球状の胴部である。頭部に貼付け凸帯をもつ。	④⑤ ハケ 6本/cm →ミガキ	ナデ	赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~4) 金 ○		
130	甕	底径 7.6 残高 3.8	底平の底部はややくびれ内溝気味に立ち上がる。	ミガキ	ハクリ	橙色 にぶい黄褐色	石・長 (1~7) ○		

SB 4出土遺物観察表 (土製品)

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外) (内面)	触 感	備考	図版
				外 面	内 面				
131	壺	底径 残高 5.2 9.0	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ ⑤本/cm	指頭痕	褐色 黒褐色	長(1~2) ○		
132	壺	底径 残高 (5.0) 4.5	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ ⑧本/cm	指頭痕	にぶい黄褐色 にぶい橙色	石・長(2) ○		
133	壺	底径 残高 1.6 1.7	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ ⑨本/cm	指頭痕	褐色 にぶい橙色	長(1) 金 ○		
134	壺	底径 残高 1.2 1.6	ボタン状に突出した平底。	ミガキ	ハケ ⑩本/cm	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) 金 ○		
135	壺	底径 残高 (1.2) 6.8	ボタン状に突出した平底。	ミガキ	ナデ	黒褐色 黄灰色	長(1~4) ○		
136	鉢	口径 残高 (31.0) 6.8	口縁部が外反し、腹部外面は粘土を貼付け肥厚する。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) 金 ○		
137	鉢	口径 残高 (22.5) 3.8	外反する口縁部の内外面に棱をもつ。	ナデ	巻ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~2) 金 ○		
138	鉢	口径 残高 (16.4) 4.4	外反する口縁部の内面に弱い棱をもつ。	マメツ	ハケ 5本/cm	褐灰色 灰褐色	石・長(1) 金 ○		
139	鉢	口径 残高 (25.4) 6.8	外反する口縁部の内外面に棱をもつ。	ハケ 8~10本/cm	ハケ 8本/cm	淡黄色 灰黄色	石・長(1~4) ○		
140	鉢	口径 残高 (20.0) 8.1	平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部付近がやや外反し、縁部は平らな面をなす。	タタキ→ ハケ 7本/cm	⑪ハケ 8本/cm	褐色 褐色	石・長(1~4) ○		
141	鉢	口径 残高 (37.6) 4.6	内湾気味の口縁部に縁部は平らな面をなす。	ハケ 8本/cm	ハケ 8本/cm	褐色 にぶい黄褐色	石(4) ○		
142	鉢	口径 残高 (22.6) 3.9	内湾気味の口縁部に縁部はやや外反する。	ハケ 7本/cm	ハケ 7本/cm	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
143	鉢	口径 (21.4) 底径 器高 (27.7) 10.7	やや凹む底部から内湾して立ち上がる。	マメツ	ハケ 12本/cm	褐色 褐色	石・長(1~5) ○		
144	鉢	口径 残高 (20.4) 8.9	内湾する胸部から口縁部に縁部は外方にやや肥厚される。	⑫タタキ→ナデ ⑬タタキ→ミガキ	ハケ 8~9本/cm	明褐色 明褐色	石・長(1~4) ○		
145	鉢	口径 器高 (16.3) 8.2	底部から口縁部にかけ内湾する。	タタキ→ナデ	ハケ 5~9本/cm	にぶい黄褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ○	6	
146	鉢	口径 底径 器高 (4.6) 6.4	平底の底部から内湾して立ち上がる。	タタキ→ナデ	ハケ 6本/cm	褐色 にぶい黄褐色	石(1~3) 金 ○	6	
147	鉢	口径 底径 (10.5) (18.0) 8.3	やや丸みをもつ底部から外傾して立ち上がる。	タタキ→ナデ	ハケ 5本/cm ⑭ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~5) 金 ○		
148	鉢	口径 底径 器高 (11.3) 14 6.8	僅かに残る平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	タタキ	ハケ 11本/cm ⑮ナデ	にぶい褐色 褐灰色	石・長(1~4) ○	6	
149	鉢	底径 (3.0) 残高 4.4	やや凸凹のある底部から気味に立ち上がる。	ハケ 5~9本/cm	⑯指頭痕	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~3) ○		
150	鉢	口径 底径 器高 (10.5) (3.0) 5.6	平底の底部から内湾して立ち上がり口縁部がやや内傾する。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1~2) ○	6	
151	鉢	口径 底径 器高 (7.5) (22.0) 3.6	平底の底部から内湾して立ち上がる。別部外面に棱をもつ。	タタキ→ナデ	ハケ 5本/cm ⑯ナデ	にぶい黄褐色 褐色	石・長(1~3) ○		
152	鉢	残高 29	「ハ」字状を呈する脚部に円孔が施される。(台付鉢)	マメツ	しばり痕	褐色 褐色	●		
153	鉢	口径 (7.5) 底径 (1.8) 器高 5.6	上げ底の底部付近は括れをもち、外傾して立ち上がる。	タタキ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長(1~4) 金 ○	6	
154	鉢	口径 器高 (4.4) 2.8	尖る底部から外傾して立ち上がる。(ミニチュア)	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1~3) ○		
155	高坏	口径 (2.6) 底径 器高 2.6	外反する口縁部に2条の沈線が施される。	マメツ	ミガキ	褐色 褐色	石・長(1) 金 ○		
156	高坏	残高 4.4	尖る底部から外傾して立ち上がる。	ミガキ	ミガキ	浅黄褐色 にぶい橙色	長(1) 砂 ○		
157	高坏	口径 (15.0) 底径 器高 2.3	大きめ外反する口縁部の下方には棱もみられる。	ヨコナデ	ミガキ	灰褐色 褐灰色	長(1) 金 ○		
158	高坏	残高 2.0	「ハ」字状を呈する脚部に半蔵竹管が施される。	ナデ	ハケ 10本/cm	浅黄褐色 黑色	石・長(1) ○		
159	高坏	残高 5.3	穂やかな棱をもち「ハ」字状を呈する脚部は円孔が施される。	ミガキ	ナデ	褐色 褐色	石(1) ○		

SB 4 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
160	高环	残高 4.9	棱をもつ直立気味に内傾する脚部の脚部に円孔が施される。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1) ○		
161	高环	底径 (9.0) 残高 3.0	ラフ状に広がる脚部部に円孔があり、端部は丸く残まる。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 褐色	石・長 (1) 金 ○		
162	支脚	受部径 (8.4) 底径 (9.0) 器高 5.6	中空の柱状の器壁は厚く、受部・底部は外傾する。	ナデ (指頭痕)	ハケ 7本/cm ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~3) ○		7
163	支脚	底径 (15.1) 残高 9.5	「ハ」字状に外傾する底部。	ナデ (指頭痕)	ナデ (指頭痕)	にぶい褐色 褐灰色	石・長 (1~3) 金 ○		
164	支脚	残高 10.7	受部に突起2個、背部に小さい把手部1個をもつ。	②ナデ タキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 ○		
165	支脚	残高 16.5	受部に突起2個、背部に小さい把手部1個をもつ。	②ナデ タキ	②ナデ	にぶい褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~5) 金 ○		7
166	支脚	底径 8.7 器高 12.7	中空・柱状の脚部に受部は斜めにカットされる。	ナデ (指頭痕)	②ハケ 6本/cm	にぶい黄褐色 黒褐色	石 (1~2) ○		7
167	支脚	底径 (8.6) 残高 16.9	中空・柱状の脚部に受部は斜めにカットされる。	②ナデ タキ	ナデ (指頭痕)	浅黄褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○		7
168	器台	口径 (26.6) 器高 21	大きく外反する口縁部に端部はややむき出る。	ミガキ	②ハケ (12本/cm)	赤色 明赤褐色	長 (2) ○		
169	器台	残高 3.0	上下方に拡張される口縁部の端面に3条の凹線が見られ、最長の貼文がつく。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	長 (1) ○		
170	器台	脚部径 (10.2) 残高 5.4	円柱を呈する脚部に円孔が穿たれる。	ミガキ	ナデ	橙色 明赤褐色	石 (1~3) ○		
171	瓶	底径 (4.4) 残高 3.4	平底の底部に円孔が穿たれる。	タキ	ナデ (指頭痕)	褐灰色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
172	瓶	底径 (3.6) 残高 2.5	平底の底部に円孔が穿たれる。	タキ	ハケ (3本/cm)	黄灰色 黒褐色	石・長 (1~2) ○		

表 13 SB 4 出土遺物観察表 (鉄製品)

番号	器種	残存	法量				備考	図版
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
173	鉄 簋	腹身部	3.97	1.8	0.75	3.64		7

表 14 SB 4 内 K 5 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
174	甕	口径 (16.8) 残高 8.5	補やかに「く」字状を呈する口縁部。	①ハケ (12~15本/cm) ②タキ	ハケ (12~15本/cm)	灰白色 にぶい褐色	石・長 (1~2) 金 ○		
175	甕	底径 15.8 残高 14.9	球状の胴部に平底の底部をもつ。	④D ハケ 9本/cm ④D タキ	ハケ (9本/cm)	褐色 暗灰色	石・長 (1~5) ○		7
176	鉢	口径 9.6 底径 2.9 器高 7.2	僅かに残る平底の底部から内湾して立ち上がる。	ハケ (4本/cm)	ハケ (9本/cm)	浅黄褐色 浅黄褐色	長 (1~3) 金 ○		7
177	支脚	受部径 (7.2) 底径 (8.3) 器高 7.1	中空・柱状のもので外傾する受部は尖り気味である。器壁は厚手。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~2) ○		7
178	支脚	底径 (11.4) 残高 4.7	「ハ」字状に外傾する底部は器壁が厚い。	ナデ (指頭痕)	ナデ (指頭痕)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) 金 ○		

表 15 SB 5 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
179	甕	口径 (15.8) 残高 2.9	外反する口縁部は、やや外上方にのび丸く納まる。	①ナデ	①ナデ	褐灰色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ○		
180	甕	口径 (16.6) 残高 2.7	「く」字状に外反する口縁部に端部は平らな面をなす。	②ナデ (10本/cm)	②ナデ (7本/cm)	淡黄色 淡黄色	石・長 (1) ○		

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外) (内面)	釉 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
181	甕	口径(15.7) 残高 3.3	「く」字状に外反する口縁部に瘤部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰青褐色	石・長(1~4) ○		
182	甕	口径(12.5) 残高 7.8	内湾する胴部に丸みをもち、外反する瘤部は丸くおさまる。	⑩ ナデ ⑨ ハケ 7本/cm	⑪ ナデ ⑨ ハケ 5本/cm	橙色 橙色	石・長(1~3) ○		
183	甕	口径(17.4) 残高 9.4	「く」字状の口縁部。	⑩ マメツ ⑨ タタキ	ハケ 6本/cm	橙色 橙色	石・長(1) ○		
184	甕	口径(16.2) 残高 7.0	種やかな「く」字状の口縁部。	タタキ	ハケ 5本/cm	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1~2) 金 ○		
185	甕	底径(3.2) 残高 3.5	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ 6~8本/cm	指頭痕	にぶい褐色 褐灰色	石・長(1~3) ○		
186	甕	底径(2.8) 残高 3.3	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ 5本/cm	指頭痕	にぶい黄色 暗灰色	石・長(1~3) ○		黒斑
187	甕	底径 3.1 残高 4.9	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	タタキ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~3) 金 ○		
188	甕	底径(3.0) 残高 2.1	平底の底部から外傾して立ち上がる。	マメツ	ハケ 8本/cm ⑩ 指頭痕	赤灰色 淡黄色	石・長(1~2) ○		
189	甕	口径(22.5) 残高 2.7	やや内傾する抵張部の瘤部は水平な面をなす。(複合口縁部)	ハケ 7~8本/cm	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~3) ○		
190	甕	口径(18.0) 残高 2.9	内傾する抵張部。(複合口縁部)	ヨコナデ	ハケ 9本/cm	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) ○		
191	甕	底径(19.0) 残高 2.9	外反気味の口縁部に内傾する抵張部をもつ。(複合口縁部)	ハケ 7本/cm	ヨコナデ	黑褐色 黑褐色	石(1~2) ○		
192	甕	底径(23.0) 残高 1.9	外下方にのびる抵張部の外面に、5条の施文が施される。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1~4) ○		7
193	甕	口径(18.2) 残高 1.3	大きめ外反する口縁部に瘤部は鋸歯文が施される。	⑩ ミガキ	⑩ ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		
194	甕	口径(17.4) 残高 1.5	大きめ外反する口縁部に瘤部は上方に肥厚する。	⑩ ハケ 6本/cm	⑩ ナデ	淡黄色 浅黄褐色	石・長(1) ○		
195	甕	口径(10.4) 残高 5.2	直立気味の口縁部に継やかな瘤部をもつ。	マメツ	マメツ	黑色 にぶい橙色	石・長(1~5) ○		
196	甕	口径(10.4) 残高 2.8	直立気味の口縁部外面に2条の沈線が施される。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 橙色	密 ○		
197	甕	残高 2.7	外傾気味の瘤部に13条の沈線が施される。	ナデ	ナデ	明る褐色 明る褐色	密 ○		
198	甕	残高 3.0	瘤部に斜格子文の刷毛凸帯が貼付く。	⑩ ハケ 12本/cm	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~2) ○		
199	甕	底径(7.0) 残高 6.0	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ	ハケ 10本/cm ⑩ 指頭痕	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~2) ○		
200	鉢	口径(25.2) 残高 4.7	内湾する瘤部に口縁部は水平な面をなす。	ハケ 8本/cm	ハケ 10本/cm	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1) ○		
201	鉢	口径(18.4) 残高 4.4	内湾する瘤部に口縁部は丸く納まる。	タタキ	ハケ 8~10本/cm	灰黃褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) 金 ○		
202	鉢	口径 6.6 残高 6.5	丸みをもつ底部から内湾して立ち上がる。	指頭痕	ハケ 8~9本/cm	明る褐色 橙色	石・長(1~2) ○		
203	鉢	口径(11.0) 器高 6.5	尖り気味の底部から内湾して立ち上がる。	マメツ	ハケ 8本/cm	浅黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) ○		
204	鉢	口径 10.2 器高 7.5	尖り気味の底部から内湾して立ち上がる。	タタキ	ハケ 7本/cm	橙色 橙色	石(1~3) ○		
205	鉢	口径(8.4) 残高 5.1	「ハ」字状に外傾する。	ハケ 7~9本/cm	ナデ	にぶい橙色 浅黄褐色	石・長(1) 金 ○		
206	鉢	底径(1.2) 残高 5.1	平底の底部から外傾して立ち上がる。	ハケ 8~8本/cm	ハケ 6本/cm	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) ○		
207	鉢	口径(10.4) 残高 3.2	瘤部に継やかな瘤をもち、口縁部は	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石(1~2) ○		
208	鉢	底径(6.0) 残高 2.7	「く」字状に突出する高台をもつ。	指頭痕	ハケ 10本/cm	橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ○		
209	鉢	底径 1.2 残高 1.9	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。(ミニチュア)	マメツ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~3) ○		
210	高环	残高 2.0	环部外面に棱をもつ。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) 金 ○		
211	高环	残高 3.1	环部外面に棱をもつ。	マメツ	マメツ	明る褐色 明る褐色	石・長(1~2) ○		

表 S B 5 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
212	高环	底径 (176) 残高 10	大きく外反する脚部に円孔と、脚端部に刻文と竹管文が施される。 内傾して立ち上がる脚部に円孔が穿たれたる。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1) ○		
213	高环	残高 7.0		⑩ ミガキ	⑨ ナデ	橙色 黑色	石・長 (1~3) ○		
214	支脚	底径 7.0 残高 3.5	やや上げ底で中央である。	指頭痕	欠損	橙色 橙色	石 (1~3) 黒斑		
215	支脚	底径 (9.0) 残高 13.8	受部に突起個をもち、上端に円孔が施される。	ミガキ + ナデ	ナデ (指頭痕)	明赤褐色 橙色	石・長 (1~4) ○		
216	器台	残高 1.1	水平にのびる口縁部の端部に波線文が施される。	⑪ ハケ (7本/cm)	⑩ ミガキ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○		
217	器台	脚径 (12.3) 残高 5.8	直立する筒状の胴部に円孔が穿たれる。	ミガキ	ハケ (5本/cm)	橙色 黒褐色	石・長 (1~2) ○		
218	筋縫車	直径 6.8 厚み 1.0	円形を呈し、中央部に焼成前の円孔が穿たれる。	ナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長 (1~3) ○		7

表 S B 5 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
219	砥石	一部	石英粗面岩	4.0	3.8	1.8	26.3		

表 S B 5 出土遺物観察表 (鉄製品)

番号	器種	残存	法量				備考	図版
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
220	鉄斧	完 形	5.6	3.3	0.5	21.73		8
221	鉄鎌	完 形	4.7	1.3	0.32	1.62		8
222	鉄鎌	鎌身部のみ	2.3	1.35	0.85	1.63		8
223	鉄鎌	茎部のみ	2.75	0.5	0.2	0.95		

表 S B 6 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
224	甕	口径 (22.8) 残高 4.3	口縁部は大きく外反し端部は平らな面をなす。	⑩ ヨコナデ ⑨ ハケ (8本/cm)	ハケ (8本/cm)	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) ○		
225	甕	口径 (18.8) 残高 6.4	外反する口縁部の端部は上方に肥厚される。	⑩ ヨコナデ ハケ (12本/cm)	⑪ ナデ ハケ (12本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石・長 (1~6) 金 ○		
226	甕	口径 (21.0) 残高 5.5	張りのない肩部から緩やかに外反する口縁部。	⑩ ハケ (12本/cm) ハケ (12本/cm)	→ 日本 (12本/cm) → 日本 (12本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1~3) ○		
227	甕	口径 (19.0) 残高 7.4	外反する口縁部。	ハケ (12本/cm)	ハケ (12本/cm)	にぶい黄褐色 橙色	石・長 (1~4) 金 ○		
228	甕	口径 (16.2) 残高 3.5	「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。	-マツ	⑩ ハケ (12本/cm)	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
229	甕	口径 (12.2) 残高 4.2	丸みをもつ。	ハケ (3本/cm)	タタキ	灰白色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
230	甕	口径 (12.4) 残高 4.5	緩やかに外反する口縁部の端部は下方に向いている。	⑩ ナデ タタキ + ハケ (5本/cm)	⑪ ハケ (5本/cm) ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~4) ○		
231	甕	底径 3.6 残高 2.9	上げ底の底部から内溝気味に立ち上がる。	ハケ (31本/cm)	⑩ ナデ・指頭痕	にぶい赤褐色 黒褐色	石・長 (1~6) ○		
232	甕	底径 3.8 残高 4.3	やや上げ底の底部から内溝気味に立ち上がる。	ハケ (5本/cm)	マツ	灰黃褐色 兩灰色	石・長 (1~4) ○		
233	甕	底径 4.8 残高 8.4	底平の底部から内溝気味に立ち上がる。	ハケ (30~12本/cm) タタキ	ハケ (4本/cm) 指頭痕	橙色 にぶい橙色	石 (1~3) ○		
234	甕	底径 (29) 残高 9.4	底平の底部から内溝気味に立ち上がる。	タタキ	ナデ ハケ (12本/cm)	灰黃褐色 橙色	石・長 (1~3) 金 ○		

S B 6出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	釉土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
235	壺	口径(24.0) 残高 10.1	外反する口縁部に上方にのびる拡張部をもつ。	ハケ→ミガキ	⑧ハケ→ミガキ	黒褐色 黒色	石・長(1~5) ○		8
236	壺	口径(15.0) 残高 4.6	内反する口縁部に波状文が施される。	ハケ(10本/cm)	マメツ	灰褐色 灰褐色	石(1~2) ○		
237	壺	口径(25.7) 残高 3.2	内側気味の拡張部の端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~4) △		
238	壺	口径(16.6) 残高 2.2	内側気味の拡張部の端部は丸く納まる。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅赤褐色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ○		
239	壺	口径(23.8) 残高 1.3	大きく外反する口縁部の端部は外下方に拡張する。	ハケ(11本/cm)	ハケ(11本/cm)	褐色 明赤褐色	石・長(1~2) ○		
240	壺	口径(18.7) 残高 1.65	大きく外反する口縁部の端部は外下方に拡張し、拡張面にヘラ刻みが施される。	ナデ	ヨコナデ	褐色 暗赤褐色	石・長(1~4) ○		
241	壺	口径(14.0) 残高 2.15	外反する口縁部の端部には条の沈線が巡る。	ナデ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石(1) ○		
242	壺	口径(19.1) 残高 2.6	外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	ナデ	ハケ(10本/cm)	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) ○		
243	壺	口径(14.4) 残高 4.0	外反気味の口縁部に端部は外方に肥厚する。	ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm)	にぶい橙色 灰白色	石・長(1~3) ○		
244	壺	頭部径(13.0) 残高 2.3	貼付凸部に斜格子の刻みがつく。	⑨ハケ	⑨指頭痕	にぶい橙色 橙色	石・長(1~2) ○		
245	壺	頭部径(10.6) 残高 3.0	頭部に4条の掛書き沈線文が巡る。	ミガキ	ハケ(5本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄色	石(1) ○		
246	壺	残高 5.15	直立気味の頭部に13条の沈線が巡る。	ミガキ	ナデ	褐色 褐色	蜜 金 ○		
247	壺	底径(4.0) 残高 3.4	平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	ハケ(12本/cm)	マメツ	黒色 浅赤褐色	石・長(1~5) ○		
248	鉢	口径(32.6) 残高 10.7	内湾気味の胴部に大きく外反する口縁部をもつ。	ハケ→(13本/cm)	ハケ→ミガキ	にぶい橙色 浅赤褐色	石・長(1~5) ○		
249	鉢	口径(18.6) 底径 5.0 高さ 12.5	丸みをもつ底部から内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。	ミガキ	ハケ →ミガキ・ナデ	にぶい橙色 にぶい黄褐色	石・長(1~5) 金 ○		
250	高杯	底径(25.0) 残高 4.7	杯部に棱をもつ口縁部は外反する。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~4) ○		8
251	高杯	口径(27.0) 残高 7.4	大きく外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	ミガキ	マメツ	赤黒色 赤黒色	蜜 ○		
252	高杯	残高 2.3	脚に円孔が穿たれる。	ミガキ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1) ○		
253	支脚	受部径(8.8) 残高 5.7	受部の断面形が「U」字状を呈する。	タタキ→ナデ	ハケ(10~12本/cm)	黄灰色 黄灰色	石・長(1~5) ○		
254	支脚	底径(17.9) 残高 7.4	「ハ」字状の脚部である。	ハケ→ナデ	ハケ(5本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	石・長(1~5) ○		
255	支脚	底径(11.6) 残高 6.9	中実の脚部は大きく外反する。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ○		
256	器台	口径(19.6) 残高 1.3	大きく外反する口縁部に端部は竹筋文と空気孔施される。	ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1) ○		
257	器台	残高 2.0	口縁端部に3条の沈線文と円形浮文が施される。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色	石・長(1~2) △		
258	器台	残高 2.7	直立気味の胴部に円孔が穿たれる。	ミガキ	ハケ(10本/cm)	明赤褐色 明赤褐色	蜜 ○		

表 19 S B 7出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	釉土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
259	壺	口径(18.8) 残高 2.1	継やかに外反する口縁部。	ヨコナデ 指頭痕	⑩ヨコナデ 指頭痕 ⑪ハケ(10本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~2) ○		
260	壺	口径(14.8) 残高 2.7	「く」字状の口縁部。	ハケ(6~10本/cm)	マメツ	にぶい橙色 褐色	石・長(1~3) ○		
261	壺	頭部径(16.0) 残高 4.8	「く」字状の口縁部	ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm)	褐色 灰白色	石・長(1~2) ○		

遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
262	甕	底径 32 残高 31	平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 黒褐色	石・長(1~2) ○		
263	甕	口径 88 底径 36 高さ 21.7	平底の底部から内湾する脚部をもち、口縁部は内削する。	ハケ 4~6本/cm →ナデ ハケ 3~10本/cm ハケ 3~6本/cm	ヨコナデ ナデ・指削痕 ハケ(4本/cm)	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		8
264	甕	口径 (9.6) 残高 15	内削する拡張部の端部は上方に肥厚される。(複合口縁型)	ミガキ	ヨコナデ 指削痕	明赤褐色 明赤褐色	石(1) ○		
265	甕	口径 (24.0) 残高 19	大きく外反する口縁部に外下方にのびる拡張部をもち、拡張面に鉛筆文が彫られる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 にぶい褐色	石・長(1) ○		
266	甕	口径 (6.4) 残高 7.7	直立気味に内削する口縁部の端部付近に5条の沈継が認める。	ミガキ	ハケ→ヨコナデ	明褐色 明褐色	石(1~5) ○		
267	甕	残高 53	直立気味に外削する頭部に沈継が認まる。	マメツ	マメツ	褐色 にぶい黄褐色	石(1~2) ○		
268	甕	残高 4.0	直立気味に外削する頭部に8条の沈継が認まる。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) 金 ○		
269	甕	底径 (6.6) 残高 2.0	底端端に低い貼付高台がつき、底部外側に逆「コ」字状の刺突文が認る。	ハケ(8本/cm)	マメツ	黒褐色 灰白色	石・長(1~2) ○		
270	鉢	口径 (16.0) 残高 8.0	外削して立ち上がる。	ハケ(10本/cm)	ハケ 9~10本/cm	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~4) ○		
271	鉢	口径 (13.2) 残高 4.5	内削して立ち上がり、口縁端部は丸く納まる。	ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm)	にぶい黄褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		
272	鉢	口径 (11.0) 残高 6.5	外削して立ち上がり。口縁端部は平らな面をなす。	ハケ(8本/cm)	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ○		
273	鉢	底径 (3.5) 残高 4.0	底端端に低い貼付高台をもつ。	ハケ 10~11本/cm	ミガキ	明褐色 褐色	石・長(1~3) ○		
274	鉢	口径 (2.0) 残高 8.1	不安定な平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	褐色 明赤褐色	石・長(1~2) 金 △		
275	鉢	残高 3.4	外削する脚部内面に朱が付着する。	ハケ	ハケ 7~8本/cm	褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) 金 ○		
276	高杯	残高 2.7	壺端外面に棱をもつ。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(1) ○		
277	高杯	残高 2.6	内反する脚柱部に円孔が施される。	ミガキ	マメツ	褐色 褐色	密 金 ○		
278	高杯	底径 (26.2) 残高 4.0	大きく外反する脚部に円孔や竹管文、刻目文が施される。	ミガキ	ハケ(8本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長(1) ○		8
279	支脚	底径 (11.1) 残高 10.6	「ハ」字状の脚部は中空である。	ミガキ	ハクリ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~3) ○		
280	支脚	底径 (9.6) 残高 3.8	「ハ」字状の脚部は中空である。	タタキ	ナデ上げ	褐灰色 にぶい褐色	石・長(1~2) ○		8

表20 S B 7 出土遺物観察表 (鉄製品)

番号	器種	残存	法量				備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
281	鉄 瓢	瓢身一部・茎部	3.3	1.3	0.45	1.23		8

表21 S D 1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
282	甕	口径 (17.2) 残高 2.4	「ハ」字状を呈する拡張部。(複合口縁型)	ハケ(10本/cm) →ナデ	ハケ 6~10本/cm	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
283	甕	残高 2.7	口縁部に7条の波状文と沈継が認る。ナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色		長(0.5) 金 ○		
284	鉢	口径 (26.2) 残高 2.8	外削する口縁部。	ハケ(6本/cm)	ハケ(4本/cm)	褐色 褐色	石・長(1) ○		
285	鉢	口径 (31.6) 残高 1.4	外削する口縁部。	ハケ(10本/cm)	ナデ	褐色 オリーブ黄色	長(1) ○		

表 22 SK 2 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
286	鉢	口径 (29.9) 残高 21	外反する口縁部に端部は括れをもち。上方にのび丸みをもつ。(縦文)	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	石 (1) ◎		

表 23 SK 3 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
287	鉢	残高 25	ボタン状の底部。	マメツ	マメツ	褐灰色 にぶい黄褐色	石 (1~4) 長 (1~2) ◎		

表 24 SK 4 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
288	壺	底径 (5.4) 残高 4.4	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	指頭痕 マメツ	マメツ	褐色 灰黄褐色	石・長 (1~5) ◎		

表 25 SK 1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
289	壺	口径 (10.6) 残高 2.0	平底の底部から外面に棱をもち内湾気味に立ち上がる。底部に回転糸引き痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄褐色 褐色	石・長 (1) 金 ◎		

第4章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 東本遺跡5次調査における種実同定

1.はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残在している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができます。

2. 試料

試料は、SB4 から採取された植物遺体 3 点である。

3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

分析の結果、モモ核(破片)が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、分類群を写真図版1に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黒褐色で梢円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面には小さな穴と不規則な溝の様なしづわがある。

5. 種実同定から推定される植生と農耕

分析の結果、SB4 から採取された植物遺体はモモ核と同定された。モモは縄文時代末から弥生時代にかけて伝来した外来の栽培植物である。

表26 種実同定結果

分類群			SB4		
学名	和名	部位	1	2	3
Arbor	樹木				
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	1	1
合計			1	1	1

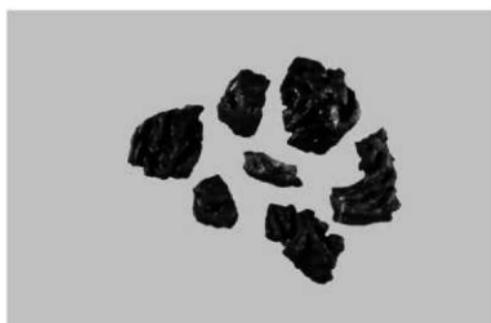
〔文献〕

南木睦彦(1991)栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通I、雄山閣出版株式会社、p. 165-174.

南木睦彦(1992)低湿地遺跡の種実、月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p. 18-22.

南木睦彦(1993)葉・果物・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版社、p. 276-283.

金原正明(1996)古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナルNo.409、ニューサイエンス社、p. 15-19.



1. SB4-1 モモ核

- 1.0mm



2. SB4-2 モモ核

- 1.0mm



3. SB4-3 モモ核

- 1.0mm

第37図 東本遺跡5次調査の種実

II. 東本遺跡5次調査における樹種同定

1.はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探るてがかりとなる。

2. 試料

試料は、SB5 から出土した炭化材 2 点である。

3. 方法

試料を剖析して新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作成し、落射顕微鏡によって 75 ~ 750 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表2に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真(写真図版2)を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面: 中型から大型の道管が、1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面: 道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、單列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30m、径 15m 以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

散孔材 diffuse-porous wood

横断面: 小型の道管が散在する。

放射断面: 道管と、異性の放射組織が存在する。

接線断面: 道管と、異性で多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料は保存状態が悪く広範囲の観察が困難であることから、散孔材の同定にとどめる。

5. 所見

分析の結果、SB5 から出土した炭化材はコナラ属アカガシ亜属および散孔材と同定された。コナラ属アカガシ亜属は一般にカシと総称されるが、イチイガシやアラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帶の照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。

表 27 樹種同定結果

サンプルNo	サンプリング遺構	取り上げNo	結果 (和名 / 学名)
5	S B 5	C - 4	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
6	S B 5	C - 18	散孔材 diffuse-porous-wood

〔文献〕

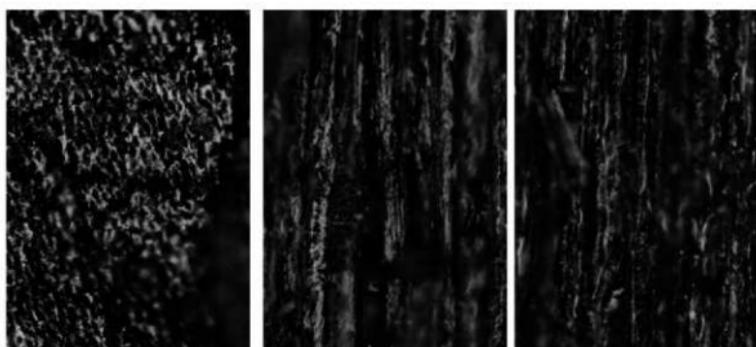
佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞 木材の構造 文永堂出版, p. 20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞 木材の構造 文永堂出版, p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧 雄山閣, p. 296



横断面 ━━━━ :0.4mm 放射断面 ━━━━ :0.2mm 接線断面 ━━━━ :0.2mm
1. 5 炭化材 SB5 C - 4 コナラ属アカガシ亜属



横断面 ━━━━ :0.4mm 放射断面 ━━━━ :0.2mm 接線断面 ━━━━ :0.2mm
2. 6 炭化材 SB5 C - 18 散孔材

第38図 東本遺跡5次調査の炭化材

第5章 まとめ

今回の調査では、弥生時代と近世の遺構を検出した。遺構は、主に弥生時代後期のものである。

層位

第IV層は南西に向けて地形が緩やかに低くなっている。この地形の低い南西部にアカホヤ火山灰(約6,300年前)の堆積である第III層がみられ、この第III層を切った状態でSB1・3やSD1・2などの遺構を検出した。また、第IV層の下にある第V層の始良Tn火山灰(約22～25万年前)は土壤の色調や黄色のガラス質の細粒を含むことなどから、西隣の東本遺跡4次調査3区で検出された始良Tn火山灰の1次堆積である第VI層①(黄褐色土)に対応するものと考えられる。

遺構

弥生時代後期の堅穴建物や溝、土坑、柱穴、近世の土坑を検出した。

弥生時代

弥生時代の遺構のはほとんどは後期に比定されるが、遺物の形態や遺構の切り合いなどから6段階に分け、さらにも末葉については①～④に細分した。

最も古い第1段階には、後期前葉に比定されるSK4がある。この土坑は平面形態が長方形で垂直に掘られて、基底面が平らなことから貯蔵施設と考えられる。

第2段階には、後期後葉に比定されるSD1がある。この溝は位置関係や規模・埋土などから、東本遺跡4次調査4北区で検出したSD401につながるものと考えられ、直線的に南西から北東を指向し、総延長は70mとなり、さらに両端は延びる様相を示している。SD401は時期決定しうる遺物がなく、遺構の切り合いから弥生時代後期末以前の埋没としか判っていないが、SD1につながる溝であれば後期後葉に比定される。

第3段階には、後期末①に比定されるSB1・7がある。SB1は比較的大型の円形建物で高床部が巡る。SB7は方形の建物であるが、今回検出した建物の中で唯一、高床部を持たない建物である。

第4段階には、後期末②のSB3・5・6がある。SB3は南東部に高床部と異なる段を有しており、この部分は出入り口等の施設も考えられる。北側の高床部で検出した溝状に延びる掘り込みは、その形状から貯蔵的な施設の可能性をもつ。SB5は炭化材や焼土などの出土状況から、焼失建物と考えられる。炭化材の上に焼土がまとまって堆積しており、この焼土は屋根を葺いた上に被せていた土が、火災を受けたときに屋根と一緒に焼け落ちたと推察される。高床部の一部では、内側に炭化した板材が貼り付いた状態で検出された。このことから、高床部内側に板材を巡らせていたことが窺える。炭化材を自然科学分析した結果、建物の構成材にカシの樹木が使われており、当時の森林植生を解明する資料となるものである。建物の床面では、不整円形の浅い掘り込みを検出した。この掘り込みは、SB5築造以前に存在していた堅穴建物の可能性が高い。SB6では主柱穴を南側2本しか確認していないが、主柱穴の位置より、本来は4本柱と想定される。

第5段階には後期末③のSB2がある。内側に八角形の高床部をもつ大型の堅穴建物である。高床部の内側には主柱穴があり、SB4と同様に中央部にも柱穴を配する構造が想定できる。また、やや内側にも主柱穴や周壁溝を検出したことから、主柱穴の位置をずらして建物を建て替えたことが判った。床面で検出した円形の土坑はSB2に伴う貯蔵穴と考えられる。

最終の第6段階には後期末④のSB4とSK3がある。内側が八角形の高床部をもつ大型の堅穴建物であ

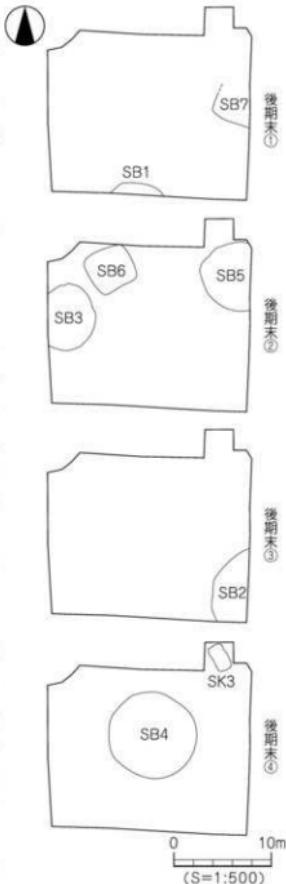
る。主柱穴は外側と内側にあり、二重構造をもつ。南東部の一辺には貼り付けの高床部と異なる地山を削り出した2段の浅い段を検出しており、SB3と同様に出入り口の施設が考えられる。高床部上面からは円形の掘り込みを検出したが、その中でも西側の掘り込みからは完形に近い鉢などが出土しており、高床部に設けられた貯蔵施設の可能性が強い。高床部の壁体に接するよう据えられていた甕は、出土状況から祭祀的な様相も考えられる。また、建物内からモモの種子が出土しており、当時、周辺にてモモを栽培していたことがわかった。SK3はSK4と同様な形状から貯蔵施設と考えられ、SB4に付随する施設の可能性をもつ。SK2は遺物の出土が僅かであり、切り合いからSD1より新しい時期のものであることは判っているが、どの段階に属するものかは不明である。この土坑はSK3・4と同様な形状から貯蔵施設と考えられる。SD2は遺物の出土が僅かであり、切り合いからSB3に先行する時期のものである。この溝からは弥生土器の小片に混じり、縄文時代晩期の浅鉢の小片が1点出土しているが、この土器の出現により調査地周辺に縄文時代晩期の遺構の存在が窺える。

今回の調査で検出した弥生時代の遺構を整理すると、円形の建物が多く、弥生時代後期の中でも末頃の建物が集中しており、後期末の中でも4段階に細分され、当地において集落が継続して営まれていたことが窺える資料である。円形の建物では、直径7mの比較的大型(SB1・3・5)のものと、9mの大型(2・4)のものがあり、SB2は建物の2/3が未検出で全容は不明であるが、SB4は2重に巡る柱構造であり、SB2も検出状況から同様の構造であると推測される。高床部は貼り付けた構造物(SB1・6)と地山を削り出して造り付けるもの(SB2)があり、両方を備えるもの(SB3・4・5)もある。また、SB3・4では、建物の出入り口と想定される高床部とは異なる段が住居の南東方向の壁体にみられている。

近世

SK1は後世の削平を受けており、床面付近での検出であるが、炭化材や焼土と骨の検出状況から、この土坑内で骨は焼成を受けたことが判った。現段階では、骨の繊維から哺乳類と考えられるが詳細は不明である。

今回の調査では、弥生時代後期末の竪穴建物を中心とした集落を形成する遺構や遺物など、当時の集落構造を解明する資料が得られた。今後の調査では、調査地周辺の弥生時代末期の詳細な集落構造や建物構造を検討する必要がある。



第39図 遺構の変遷

写 真 図 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ	スーパー・アンギュロン 90mm他 アサヒペンタックス 67
			ペンタックス 67 55mm他
			ニコンニュー FM2 ズームニッコール 28 ~ 85mm他
フィルム	白 黒 ネオパン SS・アクロス		
	カラー アスティア 100 F		

2. 遺物は、 4×5 判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G
レンズ	ジンマー S 240mmF 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

4. 製版 写真図版 線
印刷 オフセット印刷
用紙 マットコート 76.5kg
製本

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ~ 20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1 ~ 6

[大西朋子]



1. 調査前全景
(南西より)



2. 遺構検出状況
(北より)



3. 南壁土層 (北より)

図版
2



1. 調査風景
(北東より)



2. SB4 遺物出土状況①
(東より)



3. SB4 遺物出土状況②
(南東より)



1. SB5 炭化材・焼土
検出状況 (北西より)



2. SK1 遺物出土状況
(西より)



3. 造構完掘状況
(北より)

図版
4



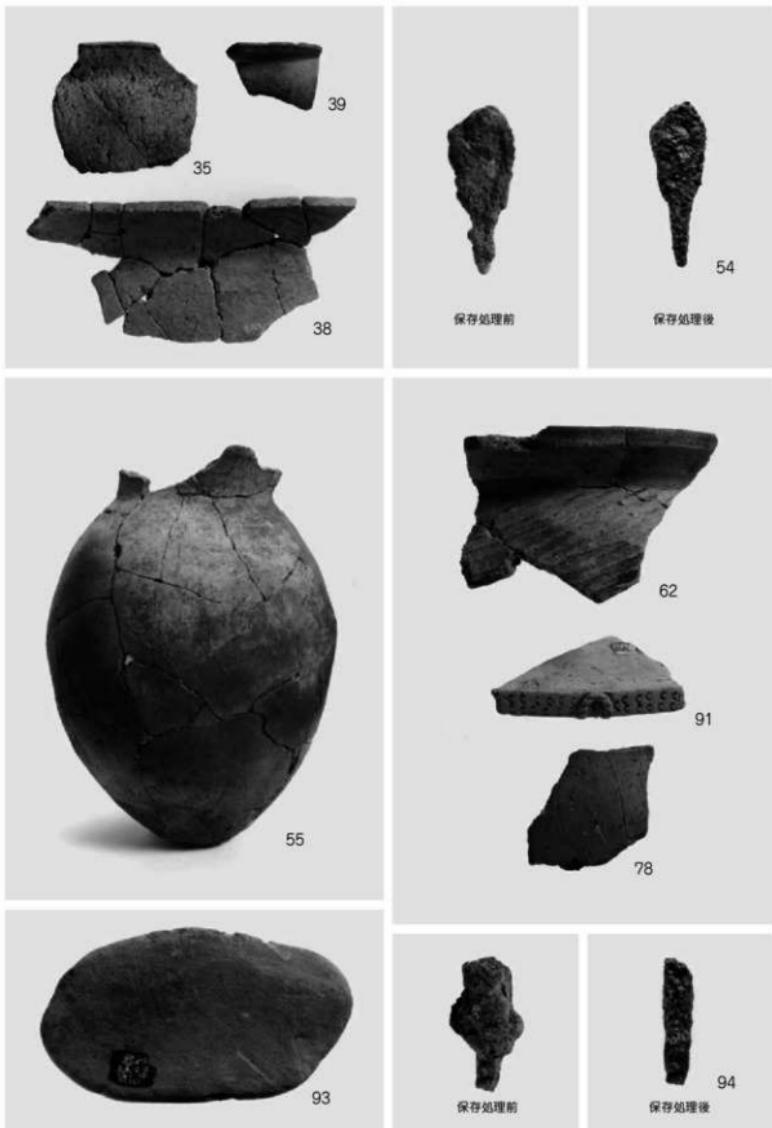
1. SB4 遺構完掘状況
(北より)



2. SB2 完掘状況
(北東より)



3. SK3 完掘状況
(北西より)

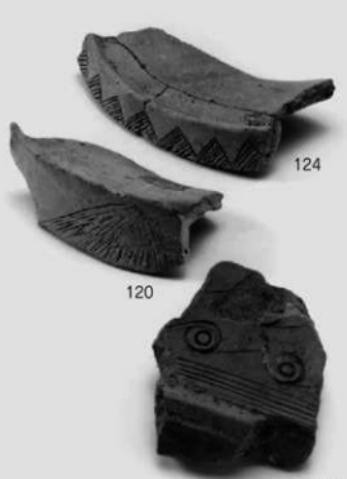


1. 出土遺物 (SB2 : 35・38・39・54、SB3 : 55・62・78・91・93・94)

図版
6



102



124

120

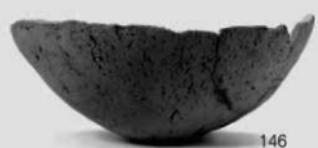
118



145



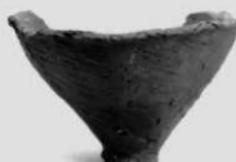
148



146



150



153

1. 出土遺物 (SB4 : 102・118・120・124・145・146・148・150・153)



1. 出土遺物 (SB4 : 162・165 ~ 167・173、SB4 内 K5 : 175 ~ 177、SB5 : 192・218)

図版
8

1. 出土遺物 (SB5 : 220 ~ 222、SB6 : 235・250、SB7 : 263・278・280・281)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	つかもといせき
書名	東本遺跡5次調査
副書名	
卷次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第187集
編著者名	河野史知・大西朋子
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦 2017(平成 29) 年 3 月 23 日

松山市文化財調査報告書 第187集

東本遺跡5次調査

平成29年3月23日 発行

編集 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
発行 埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6

TEL(089)923-6363

松山市教育委員会

〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1

TEL(089)948-6605

印刷 平和印刷工業株式会社

〒790-0921 松山市福音寺町728番地

TEL(089)947-9155㈹
